

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第29冊

亀岡遺跡Ⅱ

宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

平成15年度の多賀城関連遺跡発掘調査事業は、桃生郡鳴瀬町野蒜に所在する亀岡遺跡の第2次発掘調査を実施した。この亀岡遺跡は、古代の瓦が出土することから古代の役所跡もしくは寺院跡ではないかと注目されてきた遺跡である。第2次調査は遺跡の核心に迫るべく、昨年度遺跡内で古代瓦が集中してみつまっている野蒜小学校体育館北西と土器が最も多く散布する遺跡西の畑地に調査区を設定し、調査を行った。その結果、小学校体育館北西では瓦を持ち込み再利用した住居跡を発見し、遺跡西の畑地では古墳時代後期から古代の集落跡があることを確認した。2次にわたる調査で、瓦がまとまって出土する地点を特定でき、その理由も明らかにすることができたことは一定の成果であるが、瓦葺きの建物の所在など、今後解明すべき重要な点も多い。このことについては、手がかりの増加をまって再度調査に挑むことが必要と考えている。

さらに本年度は、多賀城関連遺跡第6次5カ年計画の第5年次にあたる。そのため第6次5カ年計画を総括し、次年度からの新5カ年計画を立案した。第6次5カ年計画のまとめは本書に、新5カ年計画の内容については次年度の報告書に掲載する。昨今の厳しい財政事情のなかで、これまで30年間継続してきた事業の意義を確認しながら、今後も実りのある調査を実施していく所存である。当研究所の事業について、引き続き御理解と御支援をお願いしたい。

刊行にあたり、御指導を賜った多賀城跡調査研究指導委員会と文化庁に感謝申し上げます。また7月26日に発生した宮城県北部連続地震の復旧で多忙な中、調査を共催した鳴瀬町教育委員会、地権者と発掘調査参加者をはじめ御協力を頂いた多くの方々にも、深く感謝申し上げます。

平成16年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所長 加藤 道男

目 次

例言・調査要項	1 頁
I. 多賀城関連遺跡の調査計画	2 頁
II. 亀岡遺跡の概要	
1. 亀岡遺跡周辺の地形と古代の遺跡	3 頁
2. 亀岡遺跡におけるこれまでの発掘調査	3 頁
III. 亀岡遺跡第2次調査	
1. 調査の目的	6 頁
2. 発掘調査と報告書作成の経過	7 頁
3. 調査区の層序	7 頁
4. 発見した遺構と遺物	8 頁
5. 考察	26 頁
6. まとめ	33 頁
IV. 多賀城関連遺跡第6次5カ年計画のまとめ	36 頁
写真図版	
報告書抄録	
第1図 亀岡遺跡周辺の主な古代の遺跡	3 頁
第2図 亀岡遺跡とその周辺の遺跡	4 頁
第3図 亀岡遺跡全体図	5 頁
第4図 A区遺構全体図	10 頁
第5図 S I 1 住居跡平面図と堆積層断面図	11 頁
第6図 S I 1 住居跡出土遺物(1)	12 頁
第7図 S I 1 住居跡出土遺物(2)	13 頁
第8図 S I 1 住居跡出土遺物(3)	14 頁
第9図 S I 1 住居跡出土遺物(4)	15 頁
第10図 S I 1 住居跡出土遺物(5)	16 頁
第11図 S I 1 住居跡出土遺物(6)	17 頁
第12図 S I 2 住居跡平面図と堆積層断面図、出土遺物	19 頁
第13図 S I 3 住居跡平面図と堆積層断面図、出土遺物	20 頁
第14図 S X 4、S X 5 ほか、A区出土遺物	22 頁
第15図 F・G・H区遺構全体図	24 頁
第16図 S X 6、S K 8、S X 9、S I 10、S I 11、S X 12ほか、F・G・H区出土遺物	25 頁
第17図 瓦の分類と瓦の特徴ごとの比率	31 頁
第18図 桃生城跡全体図	38 頁
第1表 多賀城関連遺跡第6次5カ年計画	2 頁
第2表 瓦の分類と第1次～第2次調査で出土した瓦の特徴ごとの数量	29 頁
第3表 亀岡遺跡の瓦と下伊場野窯跡A地点出土瓦の比較	32 頁

例 言

1. 本書は平成15年度に実施した多賀城関連遺跡発掘調査事業の内容を報告するもので、亀岡遺跡第2次調査と第6次5ヵ年計画のまとめを収録したものである。
2. 発掘調査は、多賀城跡調査研究指導委員会の指導のもと、年次計画に基づき実施している。
3. 本遺跡の測量については、世界測地系（日本測地成果2000）第X系座標 $X = -180,330,000\text{m}$ 、 $Y = 27,870,000\text{m}$ 、 $H = 1.694\text{m}$ を原点とした。発掘基準線の北は座標北と一致する。
4. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖17版』（日本色研事業株式会社、1996年）を参照した。
5. 瓦の分類と軒瓦の型番は、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』（1982年）による。各類の特徴は本書29頁第2表に抜き出している。
6. 貝の同定は、当研究所の阿部が行った。
7. 調査で得られた資料は、宮城県教育委員会で保管している。
8. 発掘調査と報告書作成では、尾形春男氏（亀岡区長）、相沢清一郎氏（鳴瀬町文化財保護委員長）、鈴木一松氏（野蒜小学校長）、進藤秋輝氏、高野芳宏氏、丹羽茂氏（東北歴史博物館）、後藤秀一氏、柳澤和明氏、相原淳一氏、岩見和泰氏（宮城県文化財保護課）、相澤清利氏（多賀城市埋蔵文化財センター）、佐藤敏幸氏（矢本町教育委員会）の御協力を得た。
9. 調査成果の一部は、『現地説明会資料』『第30回古代城柵官衙遺跡検討会資料』に紹介しているが、本書の内容が優先する。
10. 本書は調査員の検討を経て、吾妻が執筆し編集した。

調査要項

遺 跡 名	亀岡遺跡
所 在 地	宮城県桃生郡鳴瀬町野蒜字亀岡
調 査 主 体	宮城県教育委員会（教育長 白石晃）
調 査 担 当	宮城県多賀城跡調査研究所長 加藤道男
調 査 共 催	鳴瀬町教育委員会（教育長 久光哲朗）
調 査 指 導	多賀城跡調査研究指導委員会（委員長 須藤隆）
調 査 員	加藤道男・阿部恵・佐藤則之・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・関口重樹
地 権 者	斉藤利美・太平洋開発株式会社（代表取締役 齋藤國道）・鳴瀬町（町長 成澤孝志）
調 査 参 加 者	伊藤昭一・奥山佳代子・奥山啓一・小野徹也・京野運吉・桜井薫・櫻井ひとみ・ 雫石栄子・清水元子・高野聖子・橋本裕紀・吉田幸雄
発掘調査期間	平成15年9月29日～11月14日
調 査 面 積	約830㎡（桃生郡鳴瀬町野蒜字亀岡46-1、79-3、80、81-1）

I. 多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では昭和49年度以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と並行して、宮城県内に所在し古代多賀城と密接な関連をもつ城柵官衙遺跡と生産遺跡の調査研究を、継続的に実施している。この調査研究事業は、古代の陸奥国及び出羽国を支配するうえで中心としての役割を果たした多賀城を、多角的な視野から解明するとともに、多賀城に関連する遺跡の保存と活用を目的としている。

調査の計画は、多賀城跡調査研究指導委員会の指導に基づき5カ年ごとに計画を立て、これに従い実施してきた。これまで第1次5カ年計画1・2年次（昭和49・50年度）では河北町と桃生町にまたがる桃生城跡を、第1次5カ年計画3～5年次（昭和51～53年度）では築館町伊治城跡を、第2次5カ年計画（昭和54～58年度）と第3次5カ年計画1・2年次（昭和59・60年度）では古川市名生館遺跡と岩出山町合戦原窯跡群を、第3次5カ年計画3～5年次（昭和61～63年度）と第4次5カ年計画1～4年次（平成元～4年度）までは宮崎町東山遺跡を、第4次5カ年計画5年次（平成5年度）は松山町と三本木町にまたがる下伊場野窯跡群を、第5次5カ年計画（平成6～10年度）と第6次5カ年計画1～3年次（平成11～13年度）では再度桃生城跡を、第6次5カ年計画4年次（平成14年度）は鳴瀬町亀岡遺跡の発掘調査を実施した。これらの遺跡のなかで、伊治城跡、名生館遺跡、東山遺跡については、当研究所の調査終了後に計画的な調査が、それぞれの市と町の教育委員会に引き継がれている。さらに名生館遺跡と東山遺跡は、昭和62年に名生館官衙遺跡、平成11年に東山官衙遺跡として、伊治城跡は平成15年に、それぞれ史跡に指定されている。

平成15年度は第6次5カ年計画5年次にあたり、昨年度から継続している鳴瀬町亀岡遺跡の第2次発掘調査を行った。総事業費は6,305千円（国庫補助50%）である。

年度（西暦）	5カ年計画の内容	対象面積	発掘面積	予 算
平成11年度（1999）	桃生城跡第8次発掘調査	4,000㎡	1,200㎡	15,300千円
平成12年度（2000）	桃生城跡第9次発掘調査	10,000㎡	1,400㎡	10,500千円
平成13年度（2001）	桃生城跡第10次発掘調査	6,000㎡	600㎡	11,400千円
平成14年度（2002）	亀岡遺跡第1次発掘調査	2,000㎡	520㎡	6,500千円
平成15年度（2003）	亀岡遺跡第2次発掘調査	4,000㎡	830㎡	6,305千円

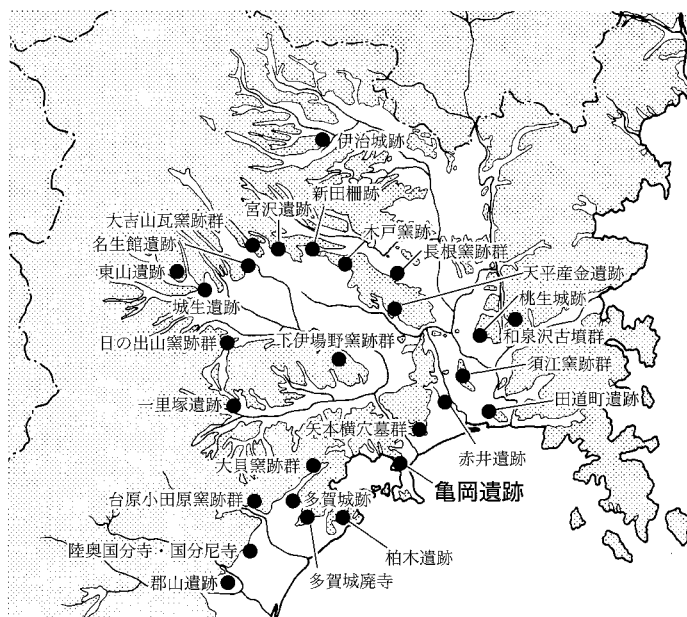
第1表 多賀城関連遺跡第6次5カ年計画

II. 亀岡遺跡の概要

1. 亀岡遺跡周辺の地形と古代の遺跡 (第1図、第2図)

亀岡遺跡は、桃生郡鳴瀬町野蒜字亀岡に所在する。宮城県内陸部から太平洋に注ぐ鳴瀬川河口の南約2km、仙石線野蒜駅の西方約0.6kmにあたる。遺跡は松島丘陵南東端に隣接する標高1～3mほどの平坦な低地に立地する。

周辺は北と東西の三方を標高36～76mの丘陵によって囲まれ、南約1kmには東名運河をはさみ太平洋が広がる。周辺には亀岡遺跡と関係が深い、古代の遺跡が多く所在する。城柵や郡衙では、南西約16kmに陸奥国府多賀城跡(註1)、北東約6kmに牡鹿柵跡あるいは牡鹿郡衙跡に推定されている矢

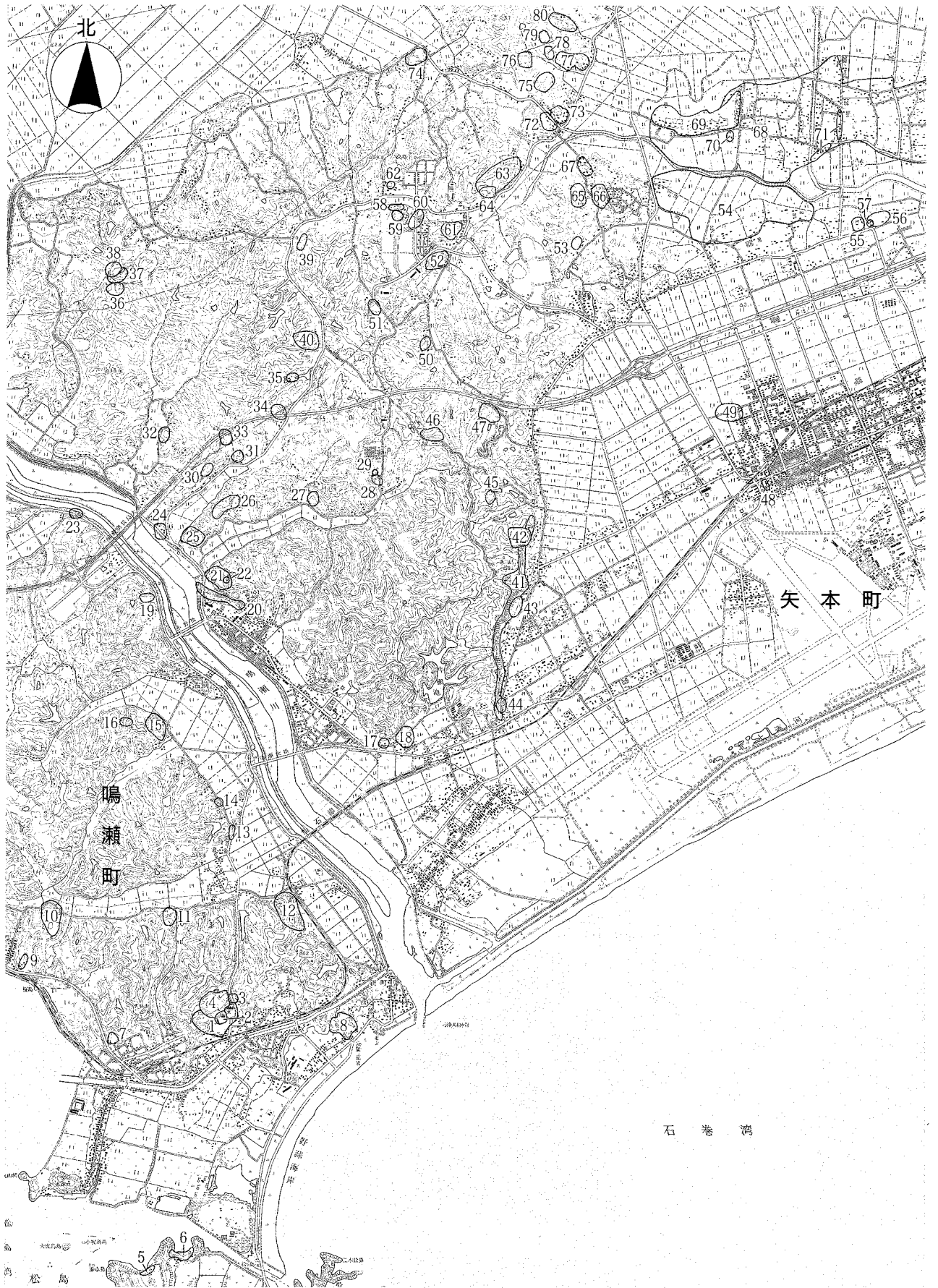


第1図 亀岡遺跡周辺の主な古代の遺跡

本町赤井遺跡(註2)、北東約13kmに延暦11年(792)分の出挙額を記載した木簡や銅製帯金具を出土した石巻市田道町遺跡(註3)、北東約21kmに天平宝字2年(758)に造営が始まる桃生城跡(註4)がある。生産遺跡では北西18kmに多賀城創建期の瓦と須恵器を焼成した松山町と三本木町にまたがる下伊場野柵跡群(註5)、北約20kmに天平産金遺跡(註6)、北東約14kmに8世紀代の瓦と8世紀後半から10世紀にかけての須恵器を生産した河南町須江柵跡群(註7)がある。墓域には、北東4kmに矢本町矢本横穴墓群(註8)、北東約22kmに和泉沢古墳群(註9)がある。これらのうち、下伊場野柵跡群から出土した瓦の特徴は、亀岡遺跡出土瓦と「極めて密接な関連を持つ」と同柵跡群の報告書で報告している(註10)。

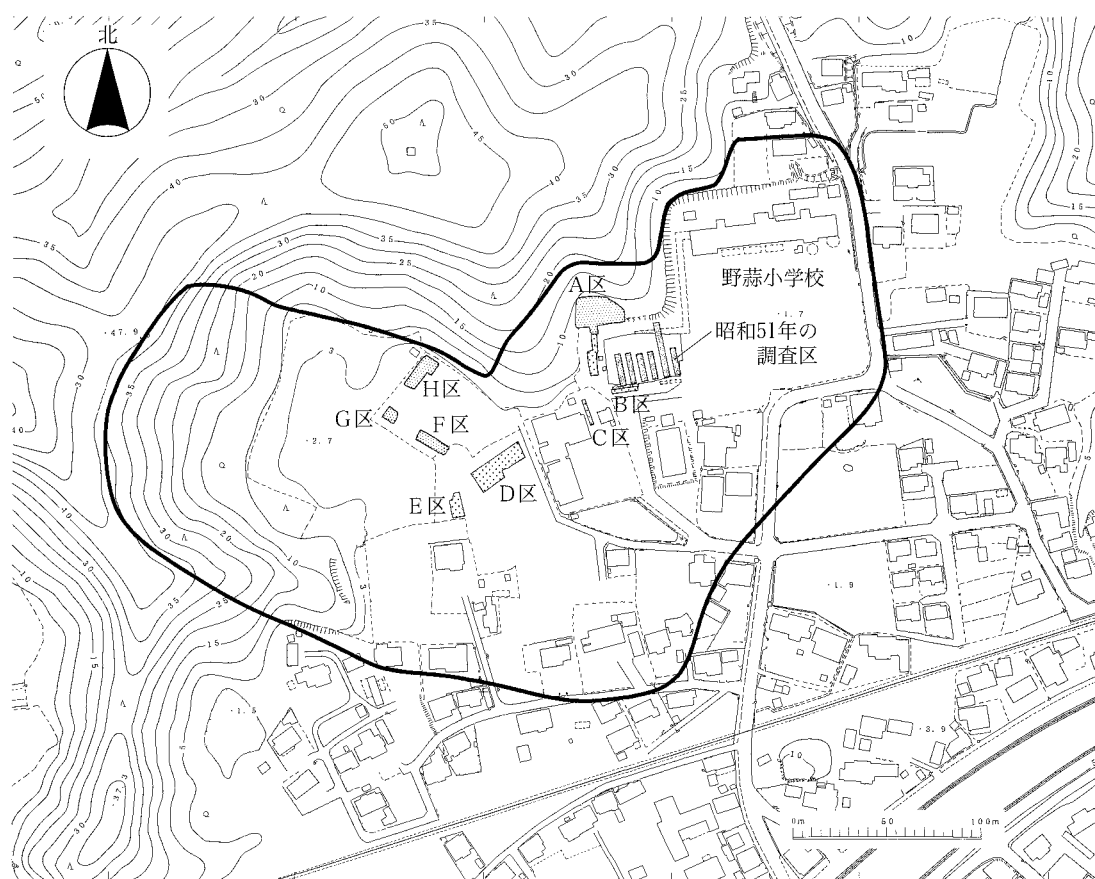
2. 亀岡遺跡におけるこれまでの発掘調査 (第3図)

亀岡遺跡を発掘した記録の最も古いものは、伊東信雄氏の報告である(註11)。この報告によると、昭和11年6月頃に内藤政恒氏が亀岡遺跡から古代の瓦を発掘し、その年秋に同氏と伊東氏が再度発掘を行い、約3m四方を調査し、地表下約75cmの位置から古代の瓦を多量に発見したことが記されている。発掘地区は、「(野蒜)小学校の西隣、校長住宅に隣接した畑地で、学校の農業実習地」と記録されているが、周辺の様子に変化し、現在その位置がわからなくなっている。また内藤政恒氏が亀岡遺跡から発見した軒瓦は『東北古瓦図録』に掲載されており、これによると「宮城県桃生郡野蒜村字亀岡小学校西隣の砂畑の北に接する藪地にて採集」「昭和十一年六月二十七日小学校西隣砂畑地下出土」(註12)と記載さ



第2図 亀岡遺跡とその周辺の遺跡

鳴瀬町				No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
No.	遺跡名	種別	時代	28	西ノ入遺跡	散布地	古代	55	二入館跡	城館	中世
1	亀岡遺跡	寺院?	奈良、平安	29	供養碑	板碑	鎌倉	56	小脇浦遺跡	散布地	古墳後、古代
2	野蒜亀岡貝塚	貝塚	縄文晩	30	寺前遺跡	散布地	古代	57	五十鈴神社古墳	円墳	古墳
3	金山貝塚	貝塚	縄文早～中、平安	31	川子沢遺跡	散布地	縄文、古代	58	中沢上遺跡	散布地	古代
4	亀岡館跡	城館	中世	32	小僧田遺跡	散布地	縄文中	59	隆泉寺跡	寺院	中世、近世
5	江ノ浜貝塚	貝塚・製塩	古墳、古代	33	高松遺跡	散布地	古代	60	僧坊遺跡	古墳・集落・寺院	古墳、中世
6	潜浦A貝塚	貝塚	縄文晩	34	西風B遺跡	散布地	古代	61	鈴原館跡	寺院城館	中世
7	長石遺跡	製塩	古墳	35	西風A遺跡	製鉄	古代	62	胎藏院跡	修験道場	近世
8	剣持館跡	城館	中世	36	天神堂遺跡	散布地	縄文、古代	63	種ノ口館跡	城館	中世
9	東遺跡	散布地・製塩	古代	矢本町				64	一杯清水遺跡	散布地	古代
10	清水中田遺跡	集落・貝塚	縄文、平安	37	小分木遺跡	散布地	古代	65	清水沢B遺跡	散布地	古代
11	飯塚貝塚	貝塚	縄文	38	町史跡小分木貝塚	貝塚	縄文前	66	手招遺跡	散布地	
12	野蒜館跡	城館	中世	39	大塩遺跡	製鉄	中世、近世	67	清水沢遺跡	散布地	古墳後、古代
13	山岸遺跡	貝塚		40	引沢B遺跡	散布地	古代	68	赤井遺跡	集落・官衙	弥生、古墳前、奈良、平安、中世
14	大栗貝塚	貝塚	縄文	41	町史跡矢本横穴墓群	横穴墓	古墳、古代				
15	三分ノ一所城跡	城館	中世	42	町史跡矢本館跡	城館	中世	69	東照井遺跡	散布地	古墳後
16	大手遺跡	散布地	古代	43	上沢目A遺跡	散布地	古代	70	伝正院跡	修験道場	近世
17	上西A遺跡	散布地	古代	44	上沢目B遺跡	散布地	古代	71	本谷土塁跡	土塁	
18	上西B遺跡	散布地	弥生、古代	45	鎌倉権五郎社跡	屋敷	近世	72	五台遺跡	散布地	縄文早・前、古代
19	宿浦遺跡	散布地	古代	46	袴館跡	城館		73	浜江場遺跡	散布地	縄文、古代、近世
20	桜ヶ森館跡	城館	中世	47	旗沢遺跡	散布地	古墳後、古代	74	餅田貝塚	貝塚	縄文前
21	町史跡 小野館跡	城館	中世	48	愛染院跡	修験道場	近世	75	国見沢A遺跡	散布地	古代
22	供養碑	板碑		49	四反走遺跡	散布地	縄文晩、古代	76	国見沢B遺跡	散布地	古代
23	川下り響貝塚	貝塚	縄文前～晩	50	旗竿館跡	城館		77	前峰遺跡	散布地	縄文、古代
24	高松貝塚	貝塚	縄文早～晩	51	引沢遺跡	散布地	古代	78	国見沢遺跡	散布地	古代
25	松ヶ森館跡	城館	中世	52	表沢遺跡	散布地	古代	79	国見台遺跡	散布地	古代
26	佐ノ下遺跡	散布地	縄文、古代	53	小松寺跡	寺院	近世	80	町史跡 平沼原貝塚	貝塚	縄文前・中
27	熊前遺跡	散布地	縄文、古代	54	小松遺跡	集落・貝塚	縄文、弥生、古代、中世				



第3図 亀岡遺跡全体図

れている。

その後、昭和51年に県文化財保護課が野蒜小学校体育館の建設に先立ち、発掘調査を行っている（註13）。調査の結果、「焼土面を伴う遺構」1基と貝層2カ所、古代瓦153点を発見している。しかし出土した全ての古代瓦は、新しい盛土からのもので、遺跡の範囲や性格は不明であった。この出土瓦については、その特徴から多賀城創建期の瓦であることが明らかになっている。

このように亀岡遺跡は、多賀城創建期の瓦を出土し、多賀城と密接に関連する遺跡と認識されてきたが、遺跡範囲やその内容についてはよくわかっていない。そこで多賀城跡調査研究所では、瓦の出土する遺跡の内容を明らかにするために、平成14年度に第1次発掘調査を実施した。その結果、現在瓦が多く出土するのは、小学校体育館北西に限られることを確認している（註14）。

（註）

- （註1） 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』（1982年）ほか。
- （註2） 矢本町教育委員会・宮城県石巻土木事務所『赤井遺跡Ⅰ―牡鹿柵・郡家推定地―』（矢本町文化財調査報告書第14集、2001年）、ほか。
- （註3） 石巻市教育委員会『田道町遺跡』（「石巻市文化財調査報告書第7集、1995年）。
- （註4） 宮城県多賀城跡調査研究所『桃生城Ⅰ』～『桃生城Ⅹ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1～2・20～27冊、1975～1976、1995～2002年）。
- （註5） 宮城県多賀城跡調査研究所『下伊場野窯跡群』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊、1994年）。
- （註6） 伊東信雄『天平産金遺跡』（宮城県遠田郡涌谷町・黄金山神社、1960）。
- （註7） 河南町教育委員会『須江窯跡群関ノ入遺跡―陸奥海道地方最大の須恵器生産地―』（「河南町文化財調査報告書第7集、1993年）、ほか。
- （註8） 矢本町『矢本町史』（第1巻、1973年）、ほか。
- （註9） 桃生郡河北地区教育委員会『和泉沢古墳群』（宮城県桃生郡河北地区文化財調査報告書）
- （註10） 註5の文献、92頁。
- （註11） 伊東信雄「秋の踏査記（下）」（『仙台郷土研究』第6巻第13号、1936年、27-32頁）。
- （註12） 原田良雄編集、石田茂作監修『東北古瓦図録』（雄山閣出版株式会社、1974年）、45頁と127頁。
- （註13） 鳴瀬町教育委員会『亀岡遺跡・金山貝塚』（宮城県鳴瀬町文化財調査報告書第1集、1977年）。
- （註14） 宮城県多賀城跡調査研究所『亀岡遺跡Ⅰ』（多賀城関連遺跡発掘調査報告書第28冊、2003年）。

Ⅲ. 亀岡遺跡第2次調査

1. 調査の目的

亀岡遺跡の性格を把握することを目的に、現在地点が判然としない昭和11年に多量の瓦が出土した場所（小学校旧校長住宅に隣接した畑地）周辺と、現在土器が最も多く散布する遺跡西方の平坦部周辺に調査区を設定し、発掘調査を実施した。

2. 発掘調査と報告書作成の経過

平成15年9月29日に機材の搬入と調査区の設定を行い、発掘調査を開始した。同月30日から10月3日までに、重機と人力で4カ所（A、F、G、H区）約830㎡の表土を除去し、数日間の中断を挟みながら11月7日まで遺構検出と精査を行っている。

A区では、昨年の調査から30cmほどの厚さで堆積する灰白色火山灰（註1）が、昭和11年の発掘区を探す上で有効な層と判断し、灰白色火山灰層以下を手掘りで行い、その後遺構検出を行っている。F、G、H区では表土と部分的に薄く堆積する灰白色火山灰層の直下で貝層と竪穴住居跡などを発見し、古代以前の貝層を伴う集落跡があることがわかった。しかし今回調査の目的とした、瓦の出土はほとんどなかった。そのため主として瓦が出土するA区の遺構検出と精査に努め、F、G、H区は遺構の掘り下げを行わず確認した遺構の記録に留めた。調査の記録は、遺構図面を縮尺20分の1及び100分の1で、写真撮影を24mm×35mmカラーズライドフィルムと60mm×70mmカラーズライドフィルム及び白黒フィルムで行っている。

調査成果の現地での公開は、10月30日と31日に、それぞれ野蒜小学校5・6年生と町民を対象に現地説明会を行っている。両日合わせて約130名と新聞社1社の参加を得ている。

遺構の埋め戻しと借地の復旧作業は、11月9日から13日まで重機と人力によって行い、14日に発掘機材を搬出し、発掘調査を終了させた。野外での調査日数は延べ29日である。

報告書作成に関わる業務は、遺物の洗浄を野外での調査期間の合間に行い、11月17日から翌年1月23日までに、遺物への注記や図面整理などを経て、印刷原稿の文章と図版を作成した。印刷部数は500部で、3月22日に刊行する。入稿までの屋内作業の期間は、延べ42日である。遺物、遺構図面、写真、調査日誌などすべての調査記録は、多賀城跡の整理方法（註2）に準じ、宮城県教育委員会にて保管している。

なお発掘調査は平成15年8月18日から2ヶ月の予定で計画していたが、7月26日に鳴瀬町と隣接する矢本町や大郷町などを震源とする宮城県北部連続地震が発生し、急遽調査区周辺に仮設住宅が設営されることになり、被災者への配慮と調査の安全確保のため、調査開始を1ヶ月半ほど遅らせている。また調査区も、体育館など構造物や急峻な崖などの近くを避けて設定している。

3. 調査区の層序

発掘調査は、遺跡として登録されている範囲のやや北よりに、4カ所（A、F、G、H区）の調査区を設けて行った。4カ所とも標高が2m前後のほぼ平坦な地である。調査直前は、A区が野蒜小学校の敷地と株式会社所有地で竹藪、F、G、H区が個人所有の畑地と笹藪である。

調査区の層序は、表土である黒色土（I層）、古代や古墳時代の遺構が掘りこまれている褐色砂より下層（III層）、I層とIII層の間を占める灰白色火山灰層から黒色砂までの遺物を多く含む層（II層）の3層に大別し、さらにII層とIII層はその内容からいくつか細別している。なお、昨年大溝とみた窪みは、

谷状の地形の一部であることがわかったため、その堆積層は基本層序の一部に含めている。

I層 黒色 (10YR1.7/1) 土

A、F、G、H区のすべての調査区に分布する。しまりがなく、層厚はA区では1 m以上、F・G・H区では60cm前後に及ぶ。上層は植物の根が多くはる。表土である。

II層 黒褐色 (10YR2/2・2/3) 砂質土、にぶい黄褐色 (10YR4/3・5/3) 砂ほか

A区では、次のII 1層からII 9層に細分した。F、G、H区は、II 1層 (灰白色火山灰層) 直下で貝層や竪穴住居跡などを確認したため、部分的にしか掘り下げていないが、II 5層またはII 9層に対応するとみられる黒褐色 (10YR2/2) 砂質土を部分的に確認している。

II 1層 灰白色 (10YR8/1) 火山灰層。均質で混じりのない火山灰層。

II 2層 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土。自然堆積層。

II 3層 褐色 (10YR4/6) 砂質土。自然堆積層。

II 4層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂。自然堆積層。

II 5層 黒褐色 (10YR2/2) 砂質土。土器片を少量含む。自然堆積層。

II 6層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂。土器片を少量含む。自然堆積層。

II 7層 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土。砕けた貝を含む層。土器片と瓦片を含む。

II 8層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂。II 4層、II 6層に比べ砂の粒が粗い。自然堆積層。

II 9層 黒褐色 (10YR2/2) 砂質土。

III層 4層に分かれる。

III 1層 明褐色 (7.5YR5/8) 砂。しまりが弱い。

III 2層 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂。固く、しまりが強い。

III 3層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土。

III 4層 褐色 (7.5YR4/6) 砂。粒子の粗い砂に貝の細片を多く含む。層厚は第1次調査で1.3 m以上あることを確認している。海砂に由来する層である。

第1次調査で示したI層、II層、III層はそれぞれ対応し、細別層の対応は次のようになる。

大溝1層はI層の一部、大溝2層はII 1層、大溝3層はII 3層、II a層はII 4層、II b層はII 5層、II c層はII 6層、II d層はII 7層、II e層はII 8層、II f層はII 9層である。

4. 発見した遺構と遺物

第2次調査で発見した遺構に、竪穴住居跡5棟、焼成遺構1基、土壇1基、貝層6ヵ所などがある。出土した遺物には、弥生土器、土師器、製塩土器 (註3)、須恵器、土製支脚、砥石、鉄釘などがある。これらの遺構と遺物について、精査を行ったA区と、遺構の掘り下げを行っていないF、G、H区の2つに分けて説明する。

(1) A区 (第4図)

A区は小学校体育館の北西に位置し、南北約17m、東西約28mの不整形、約420m²の調査区である。調査区は、東西と北の三方を標高30mほどの低丘陵に囲まれた谷筋の竹藪であったが、前に畑地として耕作していた形跡があり、平坦である。遺構はⅡ1層上面でSX4と土壇、Ⅱ8層上面でSX5貝層、Ⅲ1層上面でSI1、SI2、SI3竪穴住居跡と土壇を発見した。SI1、SI2、SI3、SX4、SX5、遺構外出土の遺物の順に説明する。

【SI1住居跡】(第5図)

〔位置〕調査区の中央に位置し、Ⅲ層上面で検出した。

〔重複〕SX4と重複し、SX4より古い。

〔規模と平面形〕平面形は一辺で4.6mの方形である。

〔堆積層〕黒褐色砂質土で、層の硬軟と炭の混入から3層に区分した。1層と2層は自然堆積層で、3層はカマド機能時に堆積した層である。

〔壁〕床から急な角度で立ち上がる。最も残りの良い北壁で42cmの高さである。

〔床〕Ⅲ層をそのまま床としている。床面積は約21m²である。

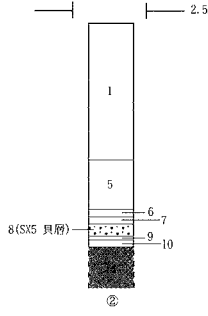
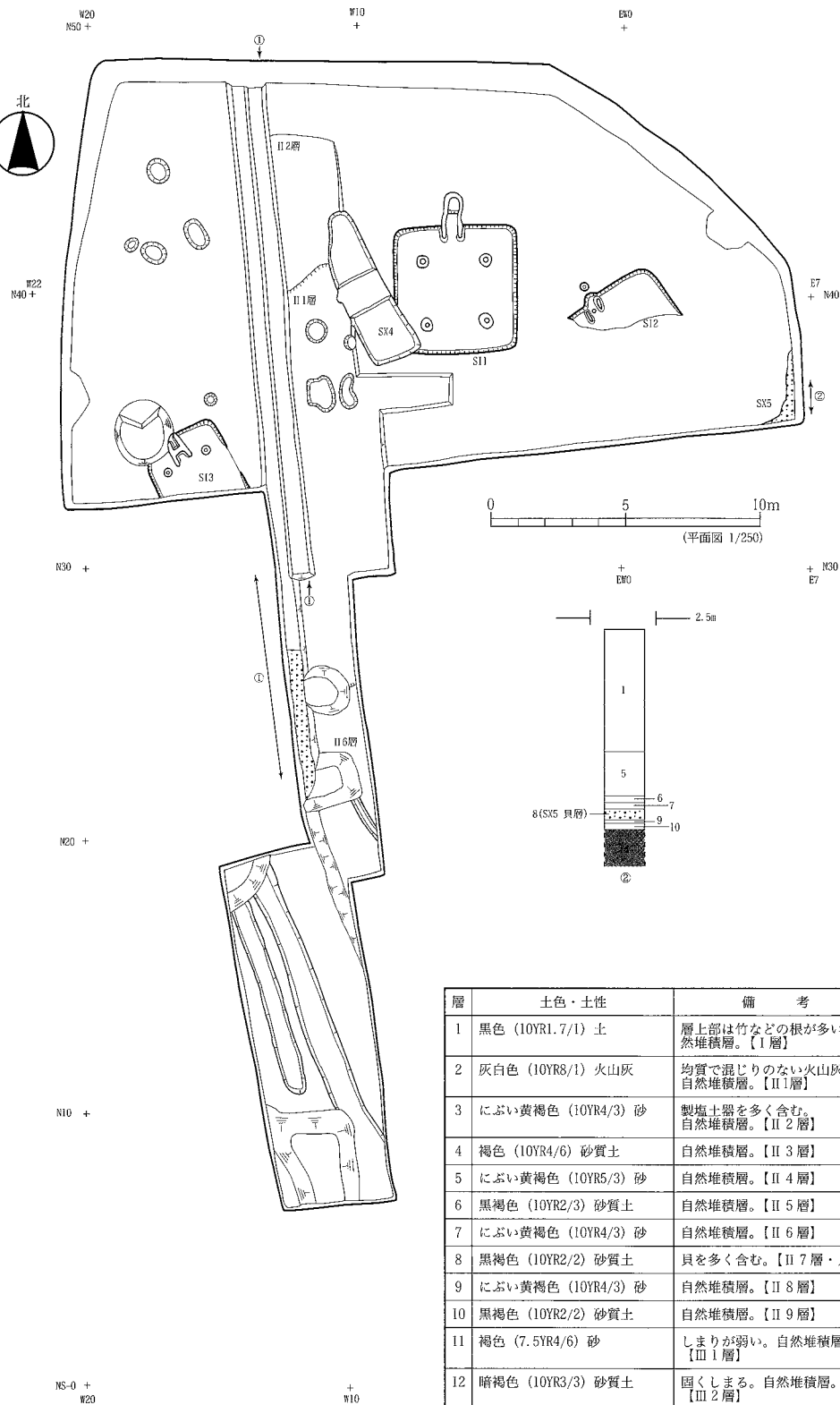
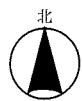
〔支柱穴〕4個確認した。それぞれ一辺25~40cmの方形の柱穴掘方に、径約15~25cmの柱痕跡が認められる。これらは住居の4隅にほぼ対応して配置することから、住居の屋根を支える主要な柱穴と考えられる。

〔カマド〕北壁に位置する。燃焼部と煙道部は壁と一体とし、底もほぼ同じ高さであるが、煙出部分がわずかに低い。大きさは奥行き180cm、幅50cmで、奥壁と側壁は板状に加工した凝灰岩を主体とし、部分的に瓦と粘土を利用し構築している。側壁に利用した凝灰岩は、通称野蒜石と呼ばれる地元産のもので、加熱により赤変している部分が多い。またカマド内堆積層からも板状に加工した凝灰岩が折り重なるように出土しており、カマドの天井部分も板状の凝灰岩で造られていたことがわかる。燃焼部の南からは、土製支脚が2個出土している(第11図22と23)。

〔周溝〕確認できない。

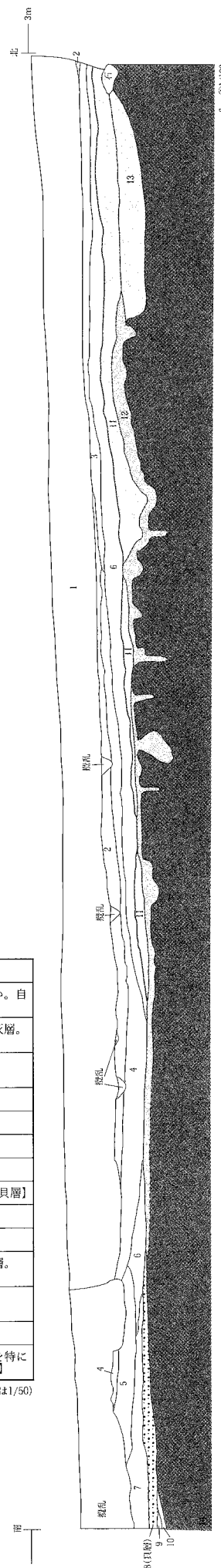
〔方向〕住居の方向をカマドの中心線でみると、ほぼ南北方向である。

〔出土遺物〕カマドの構築材に転用した丸瓦3点(第6図1~3)と平瓦2点(第7図7、第8図8)、住居北東隅で土師器壺と須恵器甕の上半部を転用した台3点(第9図15、第10図20、第11図21)、床及びカマドの底から丸瓦3点(第6図4、第7図5と6)、平瓦1点(第8図9)、土師器坏2点(第9図10と11)・壺2点(13と14)・甕4点(第10図16~19)、製塩土器鉢1点(第9図12)、土製支脚2点(第11図22と23)、砥石1点(24)が出土している。このうち甕(18)は下半を欠き、カマドの手前で横倒れの状態で出土したもので、甕に転用されていた可能性がある。このほか、柱痕跡と堆積層2層から瓦の破片6点、土師器の破片30点、須恵器の破片1点が出土している。土師器のうち製作にロクロを使用しているもの(以下ロクロ土師器と表現する)は、坏(11)1点のみである。



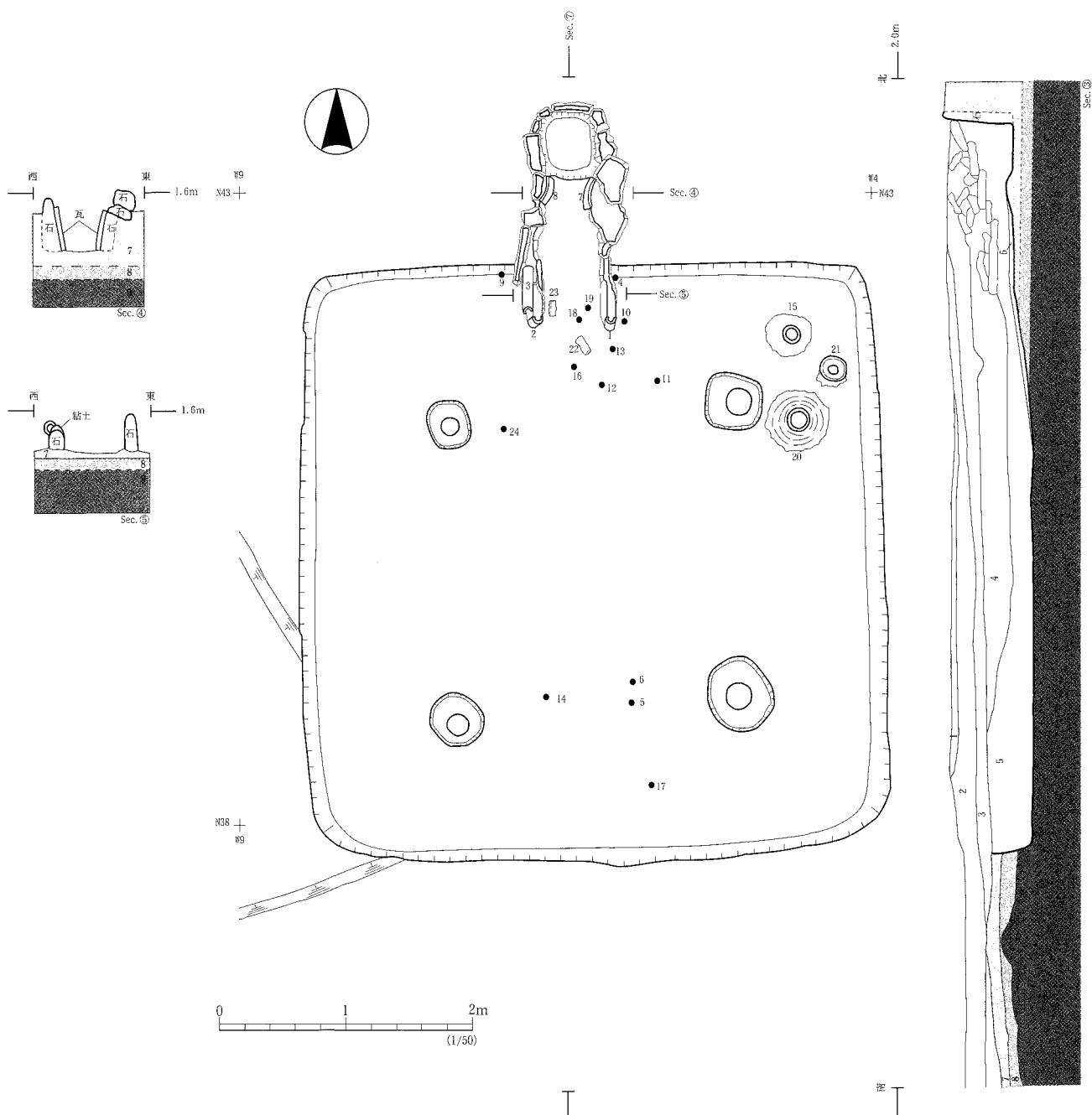
層	土色・土性	備考
1	黒色 (10YR1.7/1) 土	層上部は竹などの根が多い。自然堆積層。【I層】
2	灰白色 (10YR8/1) 火山灰	均質で混じりのない火山灰層。自然堆積層。【II 1層】
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂	製塩土器を多く含む。自然堆積層。【II 2層】
4	褐色 (10YR4/6) 砂質土	自然堆積層。【II 3層】
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂	自然堆積層。【II 4層】
6	黒褐色 (10YR2/3) 砂質土	自然堆積層。【II 5層】
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂	自然堆積層。【II 6層】
8	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	貝を多く含む。【II 7層・貝層】
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂	自然堆積層。【II 8層】
10	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	自然堆積層。【II 9層】
11	褐色 (7.5YR4/6) 砂	しまりが弱い。自然堆積層。【III 1層】
12	暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	固くしまる。自然堆積層。【III 2層】
13	オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土	自然堆積層。【III 3層】
14	褐色 (7.5YR4/6) 砂	砂の粒子は粗く貝の細片を特に多く含む。海砂。【III 4層】

(断面②は1/50)



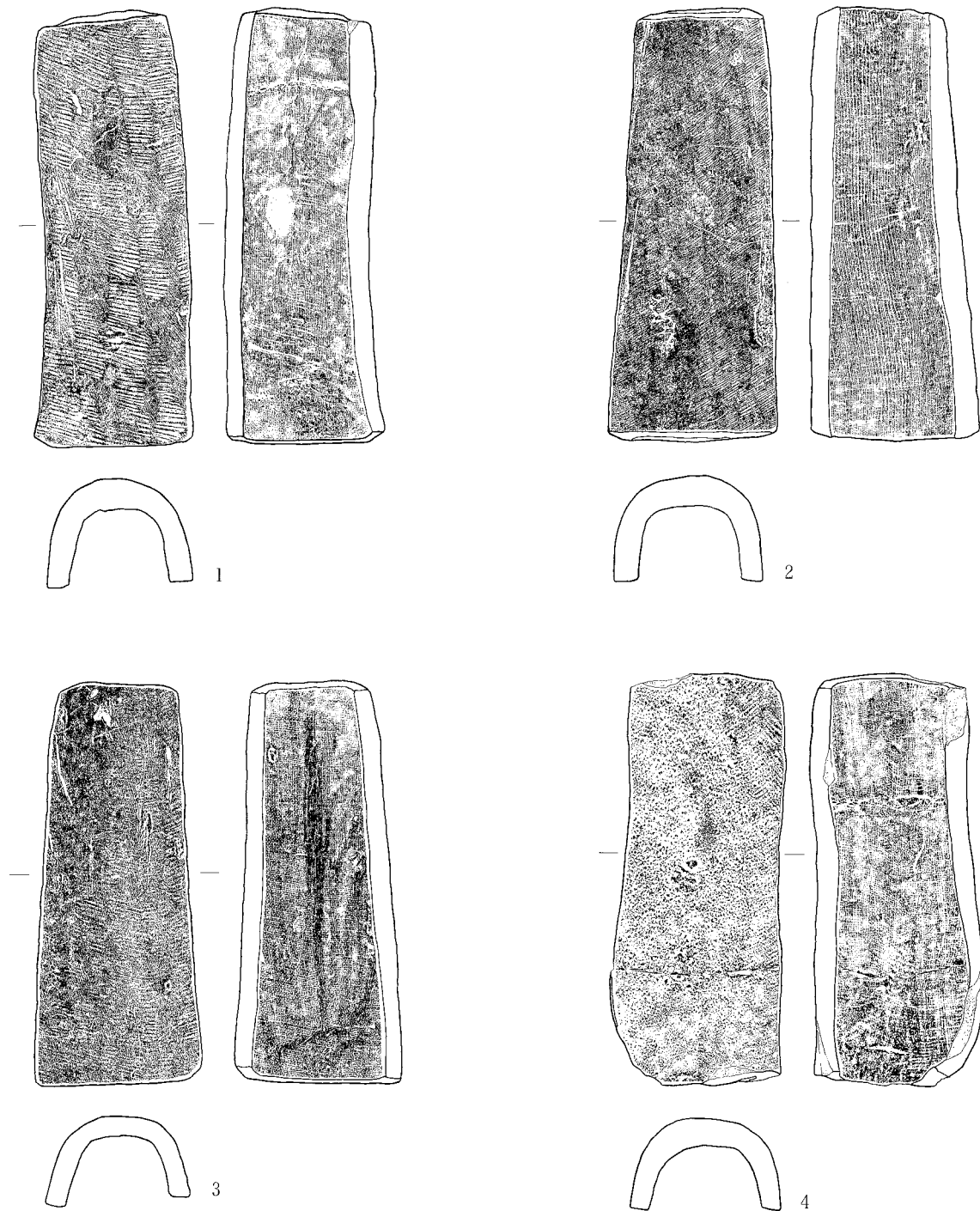
Sec. 01/100

第4図 A区遺構全体図



層	土色・土性	備 考	層	土色・土性	備 考
1	灰白色 (10YR8/1) 火山灰	均質で混じりのない火山灰層。自然堆積層。【II 1層】	5	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	自然堆積層。【住居堆積層 2層】
2	褐色 (10YR4/6) 砂質土	自然堆積層。【II 3層】	6	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	炭を若干含む。【住居堆積層 3層】
3	黒褐色 (10YR2/3) 砂質土	自然堆積層。【II 5層】	7	褐色 (7.5YR4/6) 砂	しまりが弱い。自然堆積層。【III 1層】
4	黒褐色 (10YR3/2) 砂質土	しまりが弱い。自然堆積層。【住居堆積層 1層】	8	暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	固くしまる。自然堆積層。【III 2層】
			9	褐色 (7.5YR4/6) 砂	砂の粒子は粗く貝の細片を特に多く含む。海砂。【III 4層】

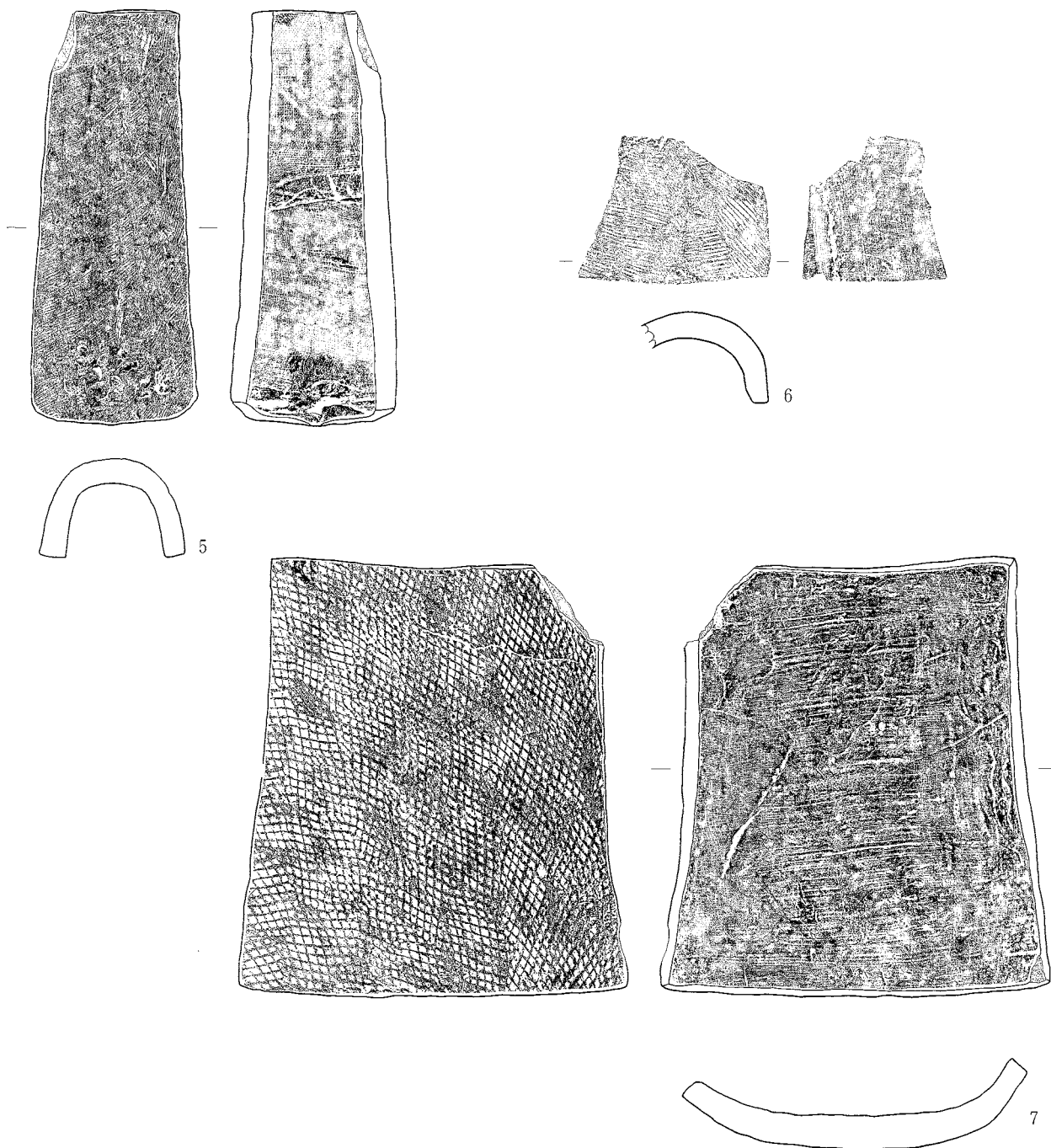
第5図 S11住居跡平面図と堆積層断面図



[縮尺は1/5。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
1	丸瓦 IA類 bタイプ	S11 カマド東壁	完形の無段丸瓦。狭端部が上で直立させ、カマド東壁端の補強材に転用。厚さ1.3~2.1cmで中央部が厚い。縦32.1~33.4cm、横10.5~12.3cm。胎土に海綿動物骨針を僅かに含む。【凸面】平行叩き目（横方向）、後に部分的にナデ。灰オリーブ色（5Y4/2）。【凹面】粘土板の糸切り痕と布目。灰色（5Y5/1）。	S11-R1	13938
2	丸瓦 IA類 bタイプ	S11 カマド西壁	完形の無段丸瓦。狭端部が上で直立させ、カマド西壁端の補強材に転用。厚さ1.4~2.2cm。縦32.3~33.3cm。横9.7~13.0cm。胎土に海綿動物骨針を含む。【凸面】平行叩き目（斜方向、端の一部に横方向）、後に部分的にナデ。灰色（5Y5/1）。【凹面】粘土板の糸切り痕と布目。灰色（7.5Y5/1）。	S11-R2	13938
3	丸瓦 IA類 bタイプ	S11 カマド西壁	完形の無段丸瓦。狭端部が南向きで凸面を上にし、カマド西壁端上部の補強材に転用。厚さ1.4~2.2cm。縦29.2~29.9cm。横9.7~13.0cm。胎土に海綿動物骨針を含む。【凸面】平行叩き目（中央に横方向、端に斜方向）、後に部分的にナデ。灰色（5Y4/1）。【凹面】粘土板の糸切り痕と布目、後に部分的に指によるナデ。灰色（5Y6/1）。	S11-R3	13938
4	丸瓦 IA類 bタイプ	S11 床	ほぼ完形の無段丸瓦。焼き歪みが顕著。厚さ1.2~1.9cmで中央部分が厚い。縦30.4~31.6cm。横11.2~13.1cm。胎土に砂粒はほとんど含まず、海綿動物骨針も含まない。【凸面】平行叩き目（斜方向）。灰色（5Y5/1）。【凹面】粘土板の糸切り痕と布目。灰オリーブ色（5Y6/2）。	S11-R4	13938

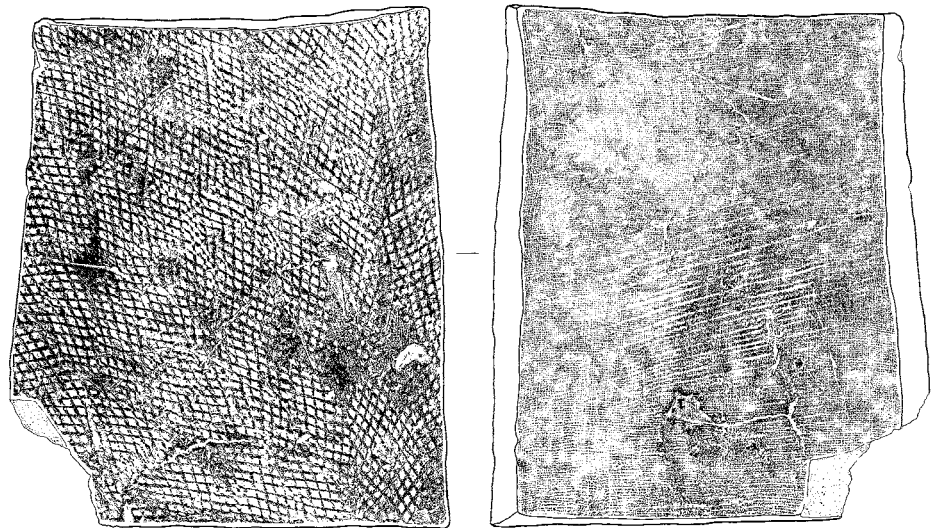
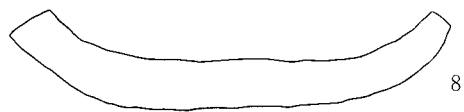
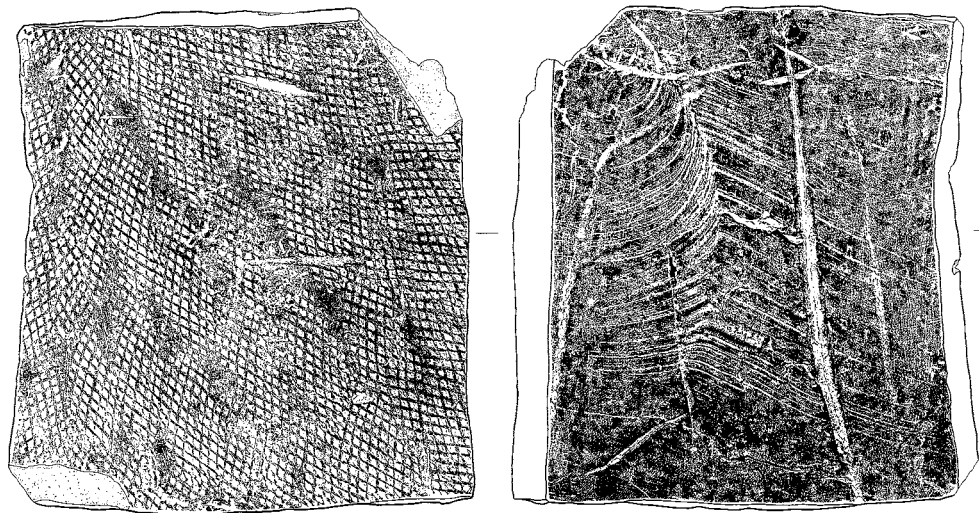
第6図 S11住居跡出土遺物(1)



[縮尺は1/5。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
5	丸瓦 1A類 bタイプ	S11 床	ほぼ完形の無段丸瓦。厚さ1.7~2.3cm。縦30.4~31.6cm。横10.2~13.1cm。胎土に海綿動物骨針を含む。[凸面]平行叩き目(斜方向)、後に部分的にナデ。灰色(5Y5/1)。[凹面]粘土板の糸切り痕と布目。灰色(5Y5/1)。	S11-R5	13939
6	丸瓦 1A類 bタイプ	S11 床	無段丸瓦。厚さ1.6~2.1cm。胎土に海綿動物骨針を含み、砂粒はほとんど含まない。[凸面]平行叩き目(中央部横方向、端部斜方向)。色調は灰色(5Y5/1)。[凹面]粘土板の糸切り痕と布目。側端部ケズリ整形。色調は灰色(5Y5/1)。	S11-R6	13939
7	平瓦 1C類 bタイプ	S11 カマド東壁	ほぼ完形の平瓦。狭端部が下で立位にし、カマド東壁中央の補強材に転用。厚さ1.4~2.9cmで中央部が厚い。縦33.4~34.1cm、横26.2~30.7cm。胎土に海綿動物骨針を含む。[凹面]粘土板の糸切り痕と布目。灰色(5Y5/1)。[凸面]斜格子叩き目の後に側端部ヘケズリ整形。灰色(10Y4/1)。	S11-R8	13940

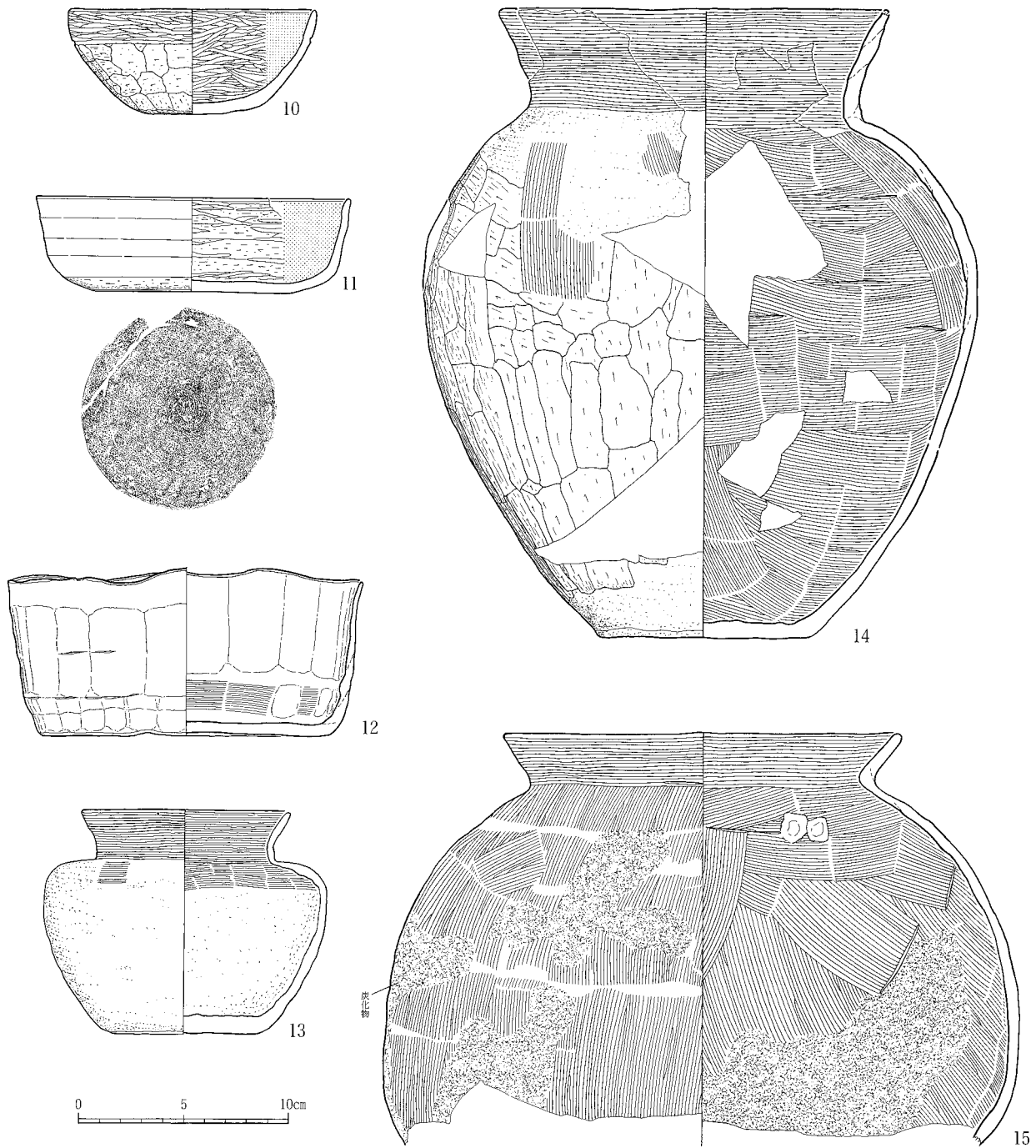
第7図 S11住居跡出土遺物(2)



[縮尺は1/5。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
8	平瓦 1C類 bタイプ	S11 カマド西壁	ほぼ完形の平瓦。狭端部を下にし立位、カマド西壁中央の補強材に転用。厚さ1.2~3.3cmで中央部分が厚い。縦31.7~33.3cm、横29.2~30.8cm。胎土に海綿動物骨針を含む。[凹面] 粘土板の糸切り痕(2方向)と布目。灰色(7.5Y5/1)。[凸面] 斜格子叩き目。側端部ヘケズリ整形。灰色(10Y4/1)。	SI1-R7	13939
9	平瓦 1C類 bタイプ	S11 床	ほぼ完形の平瓦。厚さ2.0~3.1cmで中央部分が厚い。縦33.4~34.4cm、横26.8~28.8cm。胎土に海綿動物骨針を含む。[凹面] 粘土板の糸切り痕と布目。灰色(5Y5/1)。[凸面] 斜格子叩き目。側端部ケズリ整形。灰色(10Y5/1)。	SI1-R9	13940

第8図 S11住居跡出土遺物(3)

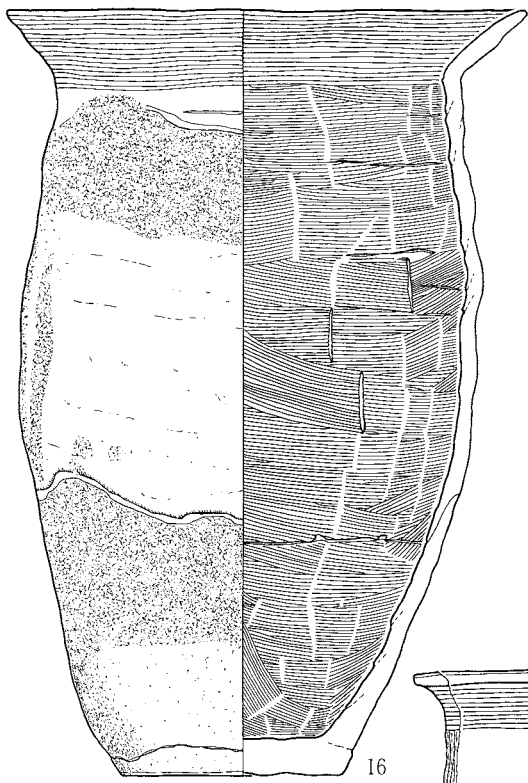


[縮尺は1/3。]

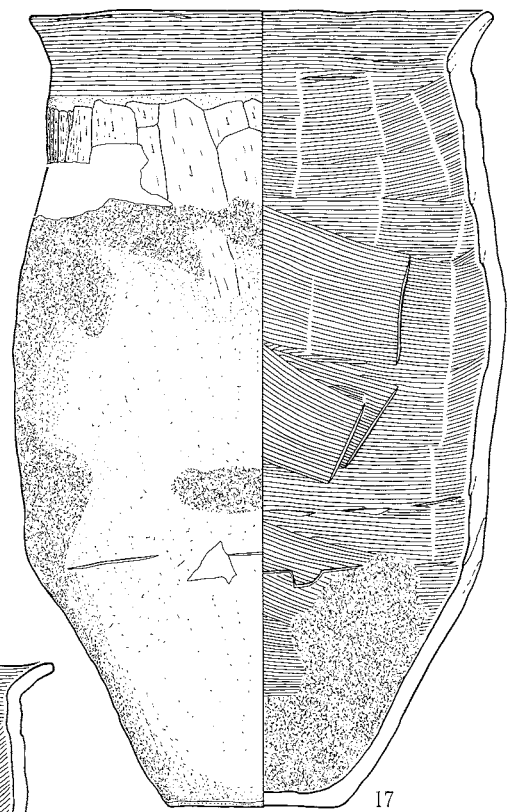
遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
10	土師器 杯	S 11 床	ほぼ完形。器高5.0cm。口径11.8~12.0cm。底径5.5~6.0cm。胎土に海綿動物骨針を含む。〔外面〕口縁部ヘラミガキ、体部ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR6/3)。〔内面〕ヘラミガキ後に、黒色処理(10YR1.7/1)。	SI 1-R20	13945
11	土師器 杯	S 11 床	残存2/3。器高4.5cm。口径15.0cm。底径9.1~9.4cm。胎土に海綿動物骨針を含む。〔外面〕体部上中部にロクロ目、底部から体部下端に回転ヘラケズリ。にぶい黄橙色(10YR6/3)。〔内面〕回転ヘラケズリ後にヘラミガキ、その後黒色処理(10YR1.7/1)。	SI 1-R19	13945
12	製塩土器 鉢	S 11 床	残存4/5。器高8.0cm。口径16.8~17.6cm。底径13.5~14.0cm。胎土に赤色砂粒を多く、海綿動物の骨針を含む。〔外面〕体部指圧痕。底部木痕跡、灰黄褐色(10YR4/2)。〔内面〕指圧痕とナデ。橙色(2.5YR6/8)。	SI 1-R22	13945
13	土師器 壺	S 11 床	残存4/5。器高10.6cm。口径(10.0)cm。底径7.0cm。加熱により外面は赤変と剥落が顕著。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体上部ナデ、底部ヘラケズリ。橙色(5YR6/6)。〔内面〕口縁部ヨコナデ、体上部ナデ。にぶい黄橙色(10YR7/4)。	SI 1-R21	13945
14	土師器 壺	S 11 床	残存2/3。口縁部を欠く。器高(29.8)cm。口径(18.5)cm。底径10.0cm。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体部上部ヘラケズリ後にヘラナデ、体中下部ヘラケズリ。浅黄橙色(7.5YR8/6)。〔内面〕口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。浅黄橙色(7.5YR8/6)。	SI 1-R15	13943
15	土師器 壺	S 11 床(北東隅)	残存7/8。上半部のみ正位で出土。台に転用。口径(18.9)cm。胎土に海綿動物骨針を含む。残存する内外面と断面下部に炭化物(煤)が付着(転用に際し、加熱し破砕カ)。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。にぶい黄橙色(10YR6/4)。〔内面〕口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。にぶい黄橙色(10YR6/4)。	SI 1-R11	13944

法量における()内の数値は、復元値。

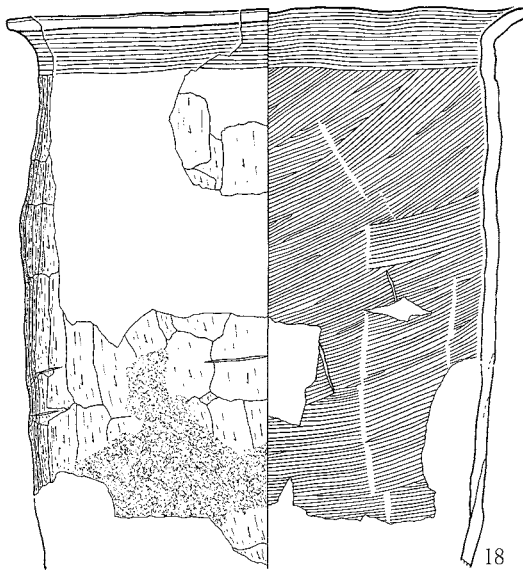
第9図 S 11住居跡出土遺物(4)



16

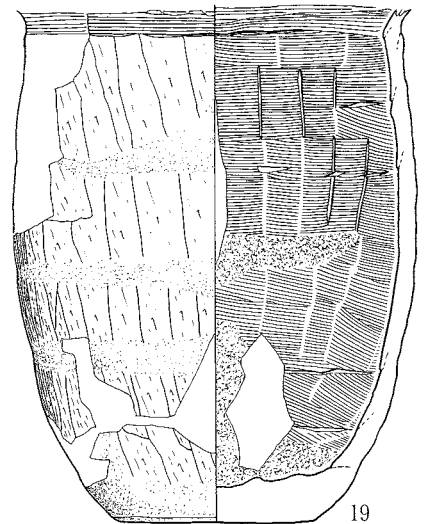


17

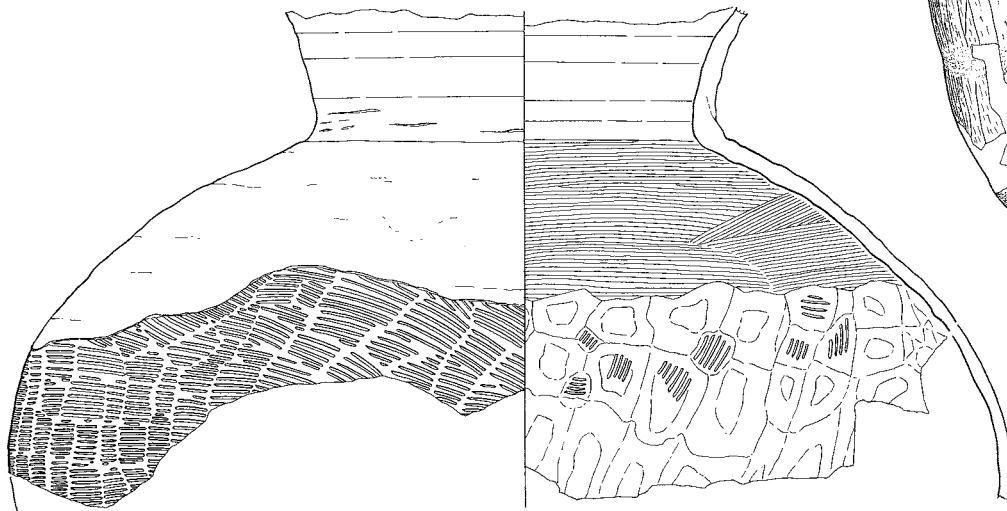


18

0 5 10cm

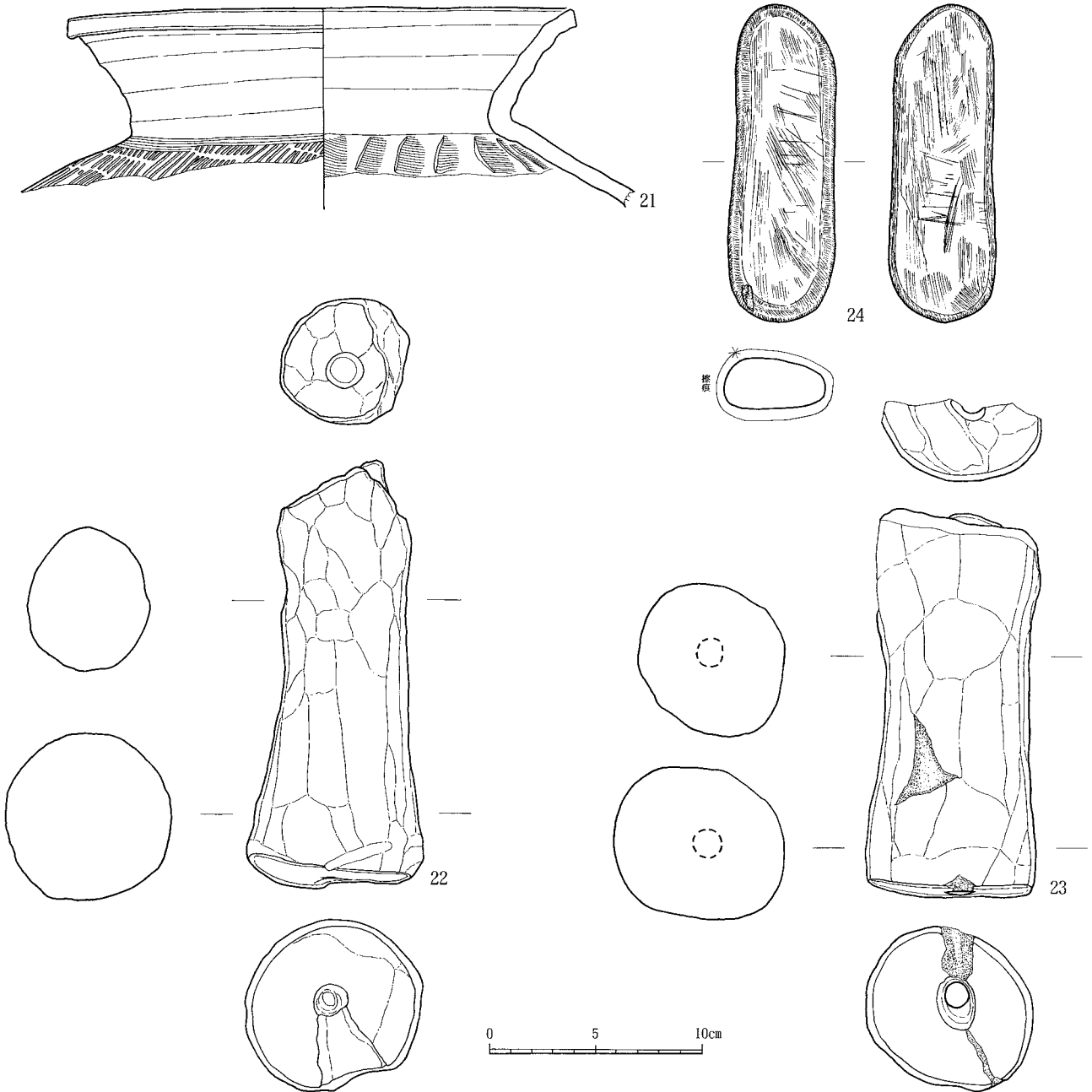


19



20

第10図 S I I 住居跡出土遺物(5)



[縮尺は1/3。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
16	土師器 甕	S I 1 床	残存7/8。器高(30.2)cm。口径20.8~21.1cm。底径8.8~9.0cm。加熱により外面は赤変と剥落が顕著、炭化物(煤)も付着。[外面]口縁部ヨコナデ、体部に薄く粘土を塗る。にぶい黄褐色(10YR5/4)。[内面]体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。にぶい黄褐色(10YR6/4)。	SI 1-R16	13943
17	土師器 甕	S I 1 床	残存7/8。器高30.6cm。口径18.2~18.5cm。底径7.0cm。加熱により外面は赤変と剥落が顕著。内外面に炭化物(焦げと煤)付着。[外面]体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。明赤褐色(5YR5/8)。[内面]体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。にぶい黄褐色(10YR7/4)。	SI 1-R14	13943
18	土師器 甕	S I 1 床	残存3/4。口径20.0~20.6cm。外面に炭化物(煤)付着。[外面]体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。橙色(7.5YR6/8)。[内面]体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。橙色(7.5YR6/8)。	SI 1-R17	13944
19	土師器 甕	S I 1 カマド底	残存1/2。外面下端は加熱により赤変と剥落が顕著。体部内面に炭化物(焦げ)付着。[外面]口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部木葉痕。浅黄褐色(10YR8/3)。[内面]口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。灰黄褐色(10YR5/2)。	SI 1-R18	13944
20	須恵器 甕	S I 1 床(北東隅)	残存4/5。上半部のみ正位で出土。口縁部を欠損。台に転用。[外面]口縁部にロクロ目、体上部に自然釉、中部に横方向の平行叩き目。暗灰色(N3/)。[内面]口縁部ロクロ目、体上部ナデ、体中部に平行叩き目や無文のあて具痕。暗灰色(N3/)。	SI 1-R13	13942
21	須恵器 甕	S I 1 床(北東隅)	残存7/8。口縁部から体上部のみ正位で出土。口縁部と口縁部内面の摩擦が顕著。台に転用。口径23.7~22.4cm。胎土に海綿動物の骨針を僅かに含む。[外面]口縁部ロクロ目、体部平行叩き目。黄灰色(2.5Y4/1)。[内面]口縁部ロクロ目、頸部にヘラによるあて目。体部に無文様のあて具痕。灰黄色(2.5Y6/2)。	SI 1-R12	13942
22	土製支脚	S I 1 床	完形。横倒で出土。全体に加熱され、表面が剥落しも多い。円筒形で上端と下端に径1.5~1.8cmの穿孔有り。長さ19.9cm。厚さ5.6~8.4cm。胎土に砂粒を多く含む。外面に指圧痕。にぶい褐色(7.5YR5/4)。	SI 1-R23	13945
23	土製支脚	S I 1 カマド底	残存4/5。横倒で出土。全体に加熱され、表面が剥落しも多い。円筒形で径1.2~1.3cmの貫通孔有り。長さ18.2cm。厚さ6.8~8.0cm。胎土に砂粒を多く含む。外面に指圧痕。にぶい褐色(7.5YR5/4)。	SI 1-R24	13945
24	砥石	S I 1-床	完形。粘板岩。全面に擦痕。長軸14.9cm。短軸5.0cm。厚さ1.9~2.1cm。重さ306g。暗灰色(N3/)。	SI 1-R10	13939

法量における()内の数値は、復元値。

第11図 S I 1住居跡出土遺物(6)

これらの中で住居廃絶時のまとまりをもつ資料は、土師器坏（10と11）・壺（13と14）・甕（16～19）、製塩土器鉢（12）、土製支脚（22と23）、砥石（24）である。

【S I 2 住居跡】（第12図）

〔位置〕 調査区の東に位置する。

〔規模と平面形〕 南辺3.5m以上、東辺1.6m以上で、平面形は方形と考えられる。

〔堆積層〕 黒褐色砂質土で、炭の混入から2層に区分した。いずれも自然堆積層である。

〔壁〕 床から急な角度で立ち上がる。最も残りの良い北西の壁で10cmの高さである。

〔床〕 地山をそのまま床としている。

〔支柱穴〕 確認できない。

〔カマド〕 北西の壁に位置する。燃焼部と煙道部の底を確認した。燃焼部は奥行き80cm、幅25cmで、側壁と支脚に凝灰岩（野蒜石）を使用し、奥壁は住居の北西壁から20cmほど張り出し急激に立ち上がる。燃焼部のほぼ中央には、凝灰岩を利用した支脚が認められた。側壁と支脚の凝灰岩は、部分的に加熱のため赤変している。平面円形深さ16cmの煙道部は、煙出しの底にあたる。

〔周溝〕 確認できない。

〔方向〕 住居の方向をカマドの中心線で見ると、北から西へ約35度偏るものである。

〔出土遺物〕 カマド内部に残された状態で土師器碗（第12図25と27）と甕（28）、床から土師器碗（26）と甕（29）が出土した。これらは住居廃絶時のまとまりをもつ資料である。この他、堆積層1層と2層から土師器の破片が8点出土した。土師器はいずれも製作にロクロを使用していない（以下非ロクロと表現する）。

【S I 3 住居跡】（第13図）

〔位置〕 調査区の南西に位置する。

〔規模と平面形〕 北辺2.9m以上、東辺2.5m以上で、平面形は方形と考えられる。

〔堆積層〕 黒褐色砂質土で、炭の混入から2層に区分した。1層は自然堆積層で、2層はカマド機能時に堆積した層である。

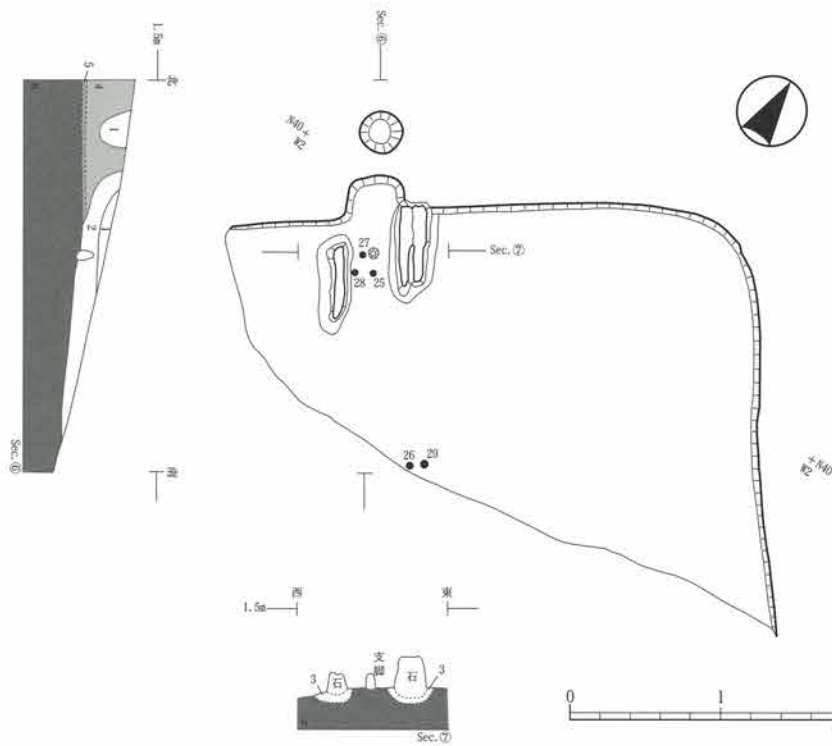
〔壁〕 床から急な角度で立ち上がる。最も残りの良い東壁で15cmの高さである。

〔床〕 地山をそのまま床としている。床面積は7㎡以上ある。

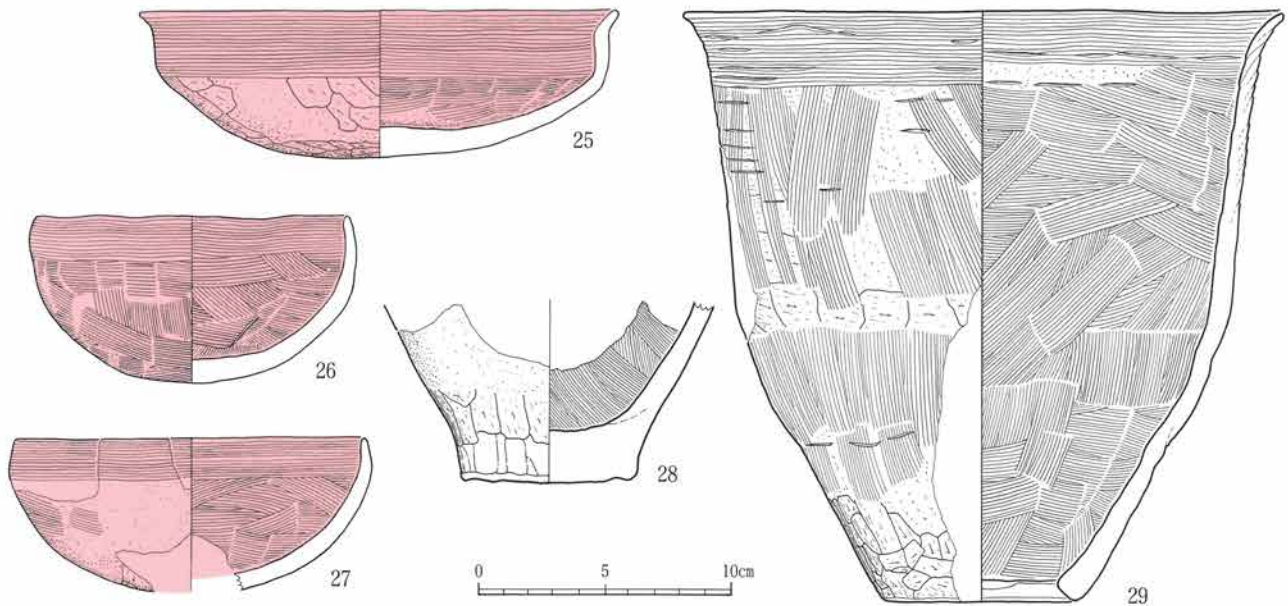
〔支柱穴〕 2個確認した。それぞれ径約30cmの円形の柱穴掘方に、径約10cmの柱痕跡が認められる。調査区外にあたる住居南半にも同様の柱穴が予想でき、これらとあわせて住居の屋根を支える主要な柱の痕跡と考えられる。

〔カマド〕 北壁に位置する。燃焼部を確認した。燃焼部の大きさは奥行き110cm、幅50cmで、側壁と天井、支脚を凝灰岩（野蒜石）によって構築し、奥壁は緩やかに立ち上がる。側壁と支脚の凝灰岩はカマド内部側が、加熱により赤変している。

〔周溝〕 認められない。



層	土色・土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2) 砂質土	しまりが弱い。自然堆積層。【住居堆積層1層】
2	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	自然堆積層。【住居堆積層2層】
3	黒褐色 (10YR3/1) 砂質土	人為堆積層。【カマド側壁据方堆積層】
4	褐色 (7.5YR4/6) 砂	しまりが弱い。自然堆積層。【Ⅲ1層】
5	暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	固くしまる。自然堆積層。【Ⅲ2層】
6	褐色 (7.5YR4/6) 砂	砂の粒子は粗く貝の細片を特に多く含む。海砂。【Ⅲ4層】

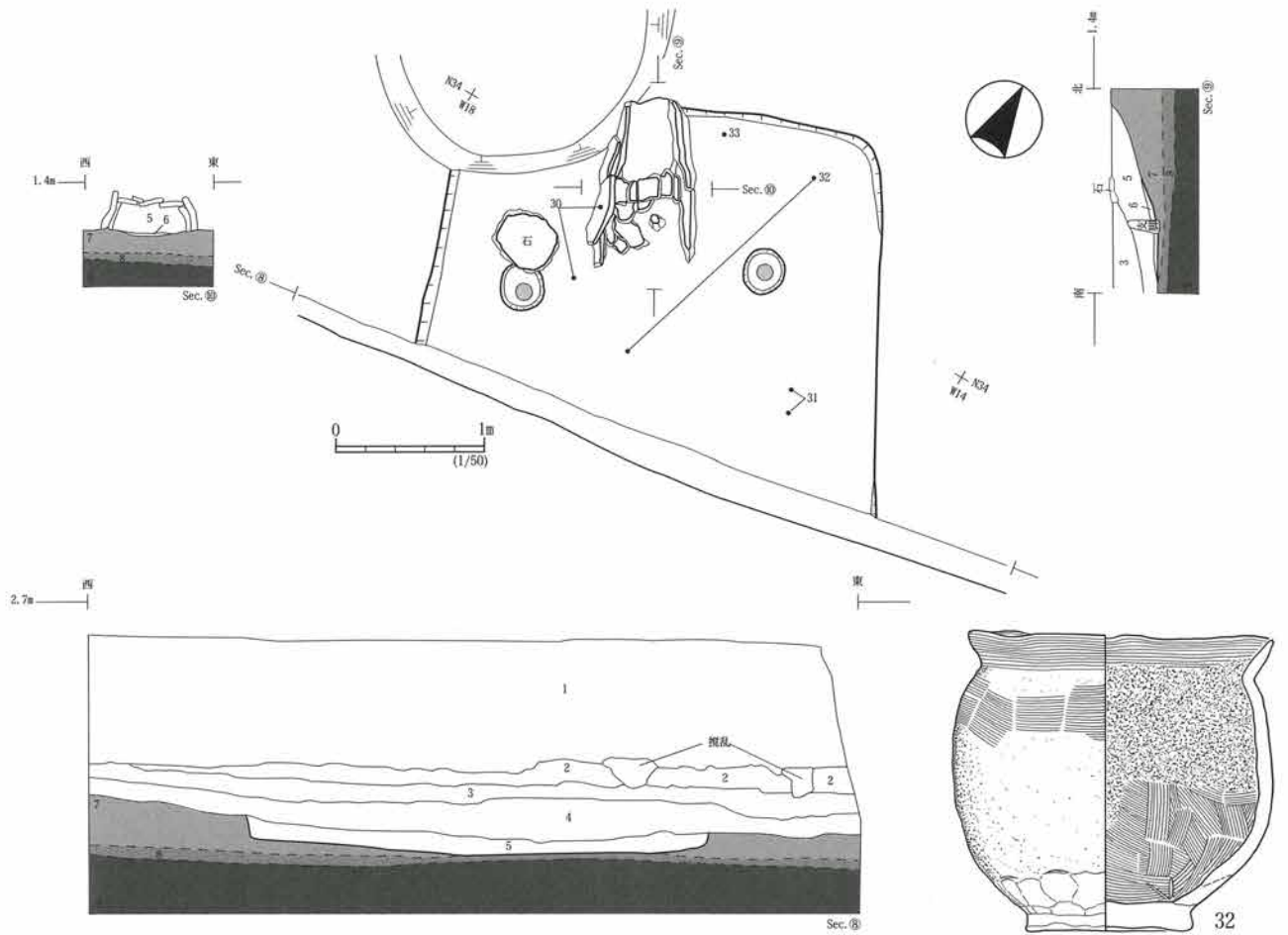


[縮尺は1/3。]

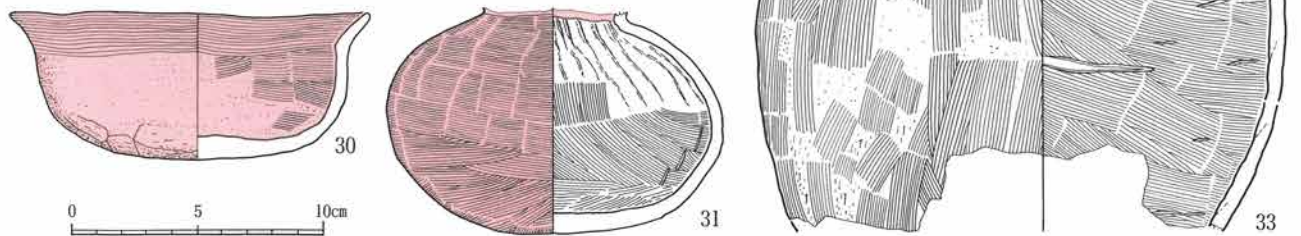
遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
25	土師器 埴	S I 2 カマド支脚上	残存4/5。器高5.7cm。口径18.9cm。丸底。〔外面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。〔内面〕体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。	SI 2-R 1	13946
26	土師器 埴	S I 2	残存2/3。器高6.6cm。口径12.5cm。丸底。〔外面〕体部ヘラケズリ後にナデ、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。〔内面〕体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。	SI 2-R 4	13946
27	土師器 埴	S I 2 カマド底	残存1/3。器高 (6.1) cm。口径 (13.8) cm。丸底。〔外面〕体部ヘラケズリ後にナデ、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。〔内面〕体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。赤彩 (明赤褐5YR5/8)。	SI 2-R 5	13946
28	土師器 甕	S I 2 カマド底	残存4/5。底径6.5~6.8cm。外面が加熱により赤変し剥落。〔外面〕体下部にヘラケズリと指圧痕。底部ヘラケズリ。浅黄橙色 (10YR8/3)。〔内面〕ヘラナデ。黒色化 (10YR1.7/1)。	SI 2-R 2	13946
29	土師器 甕	S I 2 床	残存1/4。器高23.2cm。口径 (23.9) cm。底径 (9.0) cm。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体上部ヘラケズリ後にヘラナデ、体下部ヘラケズリ。明赤褐色 (5YR5/8)。〔内面〕口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。浅黄橙色 (10YR8/3)。	SI 2-R 3	13946

法量における () 内の数値は、復元値。

第12図 S I 2 住居跡平面図と堆積層断面図、出土遺物



層	土色・土性	備考
1	黒色 (10YR1.7/1) 土	層上部は竹などの根が多い。自然堆積層。【I層】
2	灰白色 (10YR8/1) 火山灰	均質で混じりのない火山灰層。自然堆積層。【II 1層】
3	褐色 (10YR4/6) 砂質土	自然堆積層。【II 3層】
4	黒褐色 (10YR2/3) 砂質土	自然堆積層。【II 5層】
5	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	自然堆積層。【住居堆積層 1層】
6	黒褐色 (10YR2/2) 砂質土	炭を若干含む。【住居堆積層 2層】
7	褐色 (7.5YR4/6) 砂	しまりが弱い。自然堆積層。【III 1層】
8	暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	固くしまる。自然堆積層。【III 2層】
9	褐色 (7.5YR4/6) 砂	砂の粒子は粗く貝の細片を特に多く含む。海砂。【III 4層】



[縮尺は1/3.]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
30	土師器 埴	S I 3	残存4/5。器高5.8cm。口径14.3~14.8cm。全体が著しく摩滅。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体下部ヘラケズリ。赤彩(赤褐2.5YR4/8)。〔内面〕口縁部ヨコナデ、体下部ヘラナデ。赤彩(赤褐2.5YR4/8)。	SI 3-R1	13947
31	土師器 壺	S I 3 床	残存4/5。丸底。〔外面〕ナデ。赤彩(赤褐2.5YR4/8)。〔内面〕体上部しぼり目、下部ヘラナデ、その後黒色化(10YR1.7/1)。	SI 3-R3	13947
32	土師器 甕	S I 3 床	ほぼ完形。器高11.9cm。口径12.2~12.4cm。底径6.6~7.0cm。内外面に炭化物(魚げ、煤)が付着。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体上部ナデ、体下部指圧痕。明赤褐色(5YR5/8)。〔内面〕口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。にぶい黄褐色(10YR7/3)。	SI 3-R2	13947
33	土師器 甕	S I 3 床	残存1/2。口径15.8~16.8cm。〔外面〕口縁部ヨコナデ後に赤彩(赤褐10R5/4)、体部ヘラケズリ後にヘラナデ。明赤褐色(5YR5/8)。〔内面〕口縁部ヨコナデ後に赤彩(赤褐10R5/4)。体部ヘラナデ。にぶい黄褐色(10YR6/3)。	SI 3-R4	13947

法量における () 内の数値は、復元値。

第13図 S I 3 住居跡平面図と堆積層断面図、出土遺物

〔方向〕住居の方向をカマドの中心線で見ると、北から西へ約30度偏る。

〔出土遺物〕床に残された状態で土師器碗（第13図30）、壺（31）、甕2点（32と33）が出土した。これらは住居廃絶時のまとまりをもつ資料である。この他、堆積層1層から土師器の破片が6点出土した。土師器は、全て非ロクロである。

【SX4】（第4図）

〔位置〕調査区の中央に位置する。

〔重複〕S I 1と重複し、より新しい。

〔規模と平面形〕平面形は北辺1.0m、南辺1.7m、東と西辺5.7mで、北がすぼまる方形である。

〔堆積層〕黒色土と灰白色火山灰がブロック状の大きな固まりで混じる、人為堆積層である。

〔壁〕底から急な角度で立ち上がる。最も残りの良い東の壁では40cmの高さである。

〔底〕Ⅲ層をそのまま底とし、平坦である。

〔方向〕長軸の中心線で見ると、北から西へ約30度偏る。

〔出土遺物〕堆積層から弥生土器の破片2点（第14図34と35）、土師器の破片3点、製塩土器の破片が4点出土した。土師器にはロクロ土師器坏が2点含まれる。

【SX5貝層】（第4図）

〔位置〕調査区の東端に位置する。

〔規模と分布範囲〕層厚15cmほどで、分布は調査区の東と南に広がる。

〔堆積層〕褐色土に破碎した小片の貝が多量に混じる。貝の種類はマガキ、イガイ、カリガネエガイ、アサリなどがあり、前2者が比較的多い傾向にある。この貝層は、貝の破碎と摩滅が顕著で、かつ単層でほぼ水平に堆積することから、2次堆積の貝層である。

〔出土遺物〕土師器の破片3点（第14図36と37、他）、丸瓦1点が出土している。

【遺構外出土の遺物】

I層から丸瓦19点、平瓦14点、瓦の破片3点、土師器の破片31点、製塩土器の破片2点、須恵器の破片2点、II 1層から土師器の破片9点、製塩土器の破片2点、須恵器の破片1点、II 2層から丸瓦3点、平瓦1点、土師器の破片12点、製塩土器の破片55点、須恵器の破片1点、II 3層から瓦の破片11点、土師器の破片12点、製塩土器の破片5点、須恵器の破片4点、II 5層から丸瓦27点、平瓦14点、瓦の破片27点、土師器の破片169点、製塩土器の破片19点、須恵器の破片14点が出土している。I層からII 5層までロクロ土師器坏が出土している。

図示したのは、II 3層から出土した平瓦（第14図39）、II 5層から出土した丸瓦（38）、土師器高坏（40）、壺（41）、坏（42）、鉄釘（43）を図示した。丸瓦（38）と土師器坏（42）は、ほぼ完形でそれぞれS I 1とS I 2の近くから出土しており、本来これらの遺構に伴っていた可能性が高いものである。



[縮尺は43が1/2、38・39が1/5、他は1/3。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
34	弥生土器 甕	A区 SX4-1層	口縁部の破片。厚さ4~6mm。胎土に海綿動物の骨針を含む。〔外面〕口縁上部に縄文(RL)、下部にヘラケズリ。黒褐色(10YR3/1)。〔内面〕ナデと指圧痕。黒褐色(10YR3/1)。	SX4-R1	13947
35	弥生土器 甕	A区 SX4-1層	口縁下部の破片。壺体上部の可能性もある。厚さ4~5mm。〔外面〕口唇部と口縁上部に捺糸(L)の押圧痕。黒褐色(10YR3/1)。〔内面〕指圧痕。にぶい黄褐色(10YR7/3)。	SX4-R2	13947
36	土師器 高坏	A区 SX5-1層	残存2/3。胎土は特に白色で異質。〔外面〕ハケメ後にヘラミガキ。灰白色(10YR8/2)。〔内面〕ヘラミガキ。灰白色(10YR8/2)。	SX5-R1	13945
37	土師器 甕	A区 SX5-1層	残存1/2。口径14.5~15.0cm。体部内外面に炭化物(焦げ、煤)。外面下端は加熱により赤変と剥落が顕著。〔外面〕口縁部ハケメ後にヨコナデ、体部ヘラナデ。にぶい黄褐色(10YR5/4)。〔内面〕口縁部ハケメ後にヨコナデ、体部ヘラナデ。にぶい黄褐色(10YR5/4)。	SX5-R2	13945
38	丸瓦 IA類 bタイプ	A区 II 5層	ほぼ完形の無段丸瓦。厚さ1.3~1.8cm。縦29.2~29.8cm、横8.3~10.1cm。胎土に海綿動物骨針を含む。〔凸面〕平行叩き目〔中央に横方向、端に斜方向〕。灰色(N4/)。〔凹面〕布目。灰色(5Y4/1)。	A区 II5層-R1	13941
39	平瓦 ID類	A区 II 3層	厚さ1.8~2.4cm。胎土に海綿動物骨針を含まない。〔凸面〕布目の後に、平行叩き目(一部叩き目が矢羽根状に交差)。浅黄褐色(7.5YR8/4)。〔凹面〕布目の後にナデ、その後脚端部にケズリ整形。浅黄褐色(7.5YR8/4)。	A区 II3層-R2	13941
40	土師器 高坏	A区 II 5層	残存7/8。胎土は特に白色で異質。〔外面〕ヘラミガキ。灰白色(10YR8/2)。〔内面〕坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ。灰白色(10YR8/2)。	A区 II5層-R4	13947
41	土師器 壺	A区 II 5層	残存1/4。口径(25.2)cm。口縁部が2段になる。胎土に砂粒、海綿動物の骨針を含む。〔内外面〕ハケメの後に、上部ヘラミガキと下部ヘラナデ。赤彩(赤褐2.5YR4/8)。	A区 II5層-R5	13947
42	土師器 坏	A区 II 5層	ほぼ完形。器高5.4cm。口径13.4~13.7cm。丸底。胎土に砂粒を多く含む。〔外面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。明赤褐色(2.5YR5/8)。〔内面〕体部ヘラナデ後に、口縁部ヨコナデ。明赤褐色(2.5YR5/8)。	A区 II5層-R3	13946
43	鉄釘	A区 II 5層	和釘。残存長6.3cm。幅0.6cm。	RM1	13556

法量における()内の数値は、復元値。

第14図 SX4、SX5ほか、A区出土遺物

(2) F区、G区、H区 (第15図)

F区は、A区の約80mほど南西に位置し、一辺約18mと約7.5mの方形、約130m²の調査区である。G区は、F区の約20mほど北西に位置し、一辺約7mの方形、約50m²の調査区である。

H区は、G区の約20mほど北東に位置し、南北約19m、東西約9mの方形、約230m²の調査区である。これらの調査区は、標高2.5m前後の平坦な地で、調査前は畑地と笹藪であった。発見した遺構に、SX6焼成遺構、SX7貝層、SK8土壌、SX9貝層、SI10住居跡、SI11住居跡、SX12～14貝層などがある。これらの遺構はI層とII層を除去すると検出できるもので、狭い調査区での部分的な掘り下げを避け、遺構の精査は行っていない。この調査区一帯には、さらに多数の竪穴住居跡と貝層があると予想できる。検出した遺構とI層から出土した遺物の概要は次のとおりである。

【SX6 焼成遺構】 F区に位置し、I層下で確認した。10cm～60cmほどの凝灰岩（野蒜石）を配置した遺構で、凝灰岩の一部に加熱を受け赤変した痕跡がある。この凝灰岩の一部は据方を伴い、据方から須恵器坏（第16図44）と土師器の破片2点を抜き取っている。

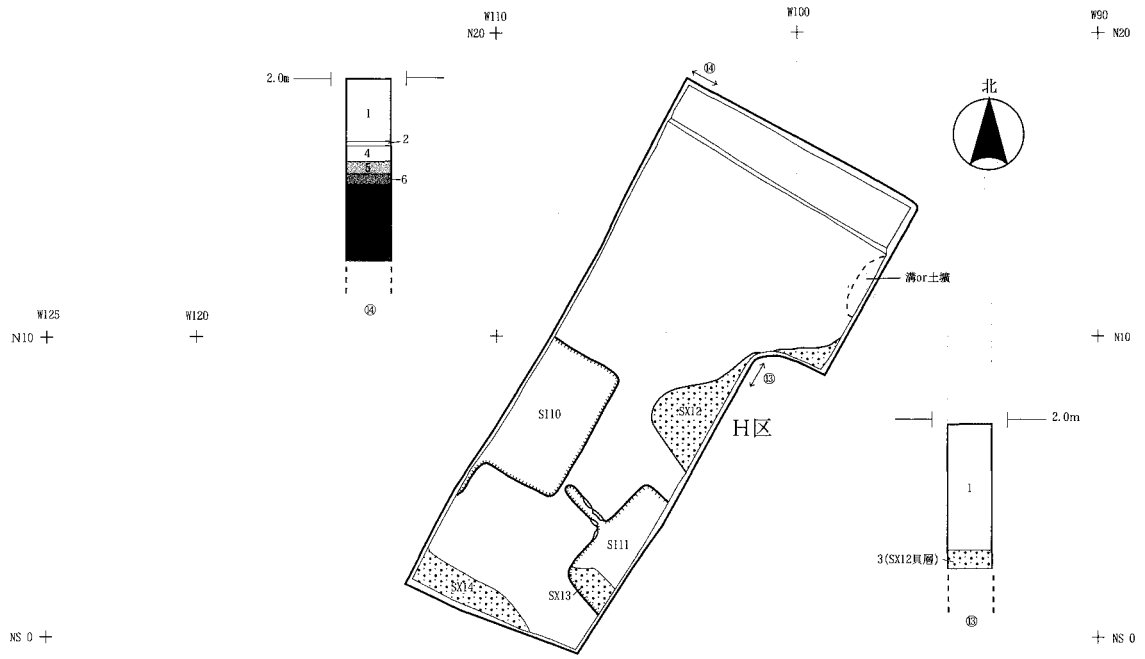
【SX7 貝層】 F区に位置し、I層下で確認した。層厚15cmほどの貝層である。堆積層から土師器の破片14点、須恵器の破片1点が出土している。土師器にはロクロ土師器坏と甕がある。貝には、イガイ、マガキ、スガイ、イシダタミガイ、クボガイ、サルボウガイ、アサリなどがある。このうちイガイが最も多く、マガキがそれに次ぎ、他は少量である。

【SK8 土壌】 G区に位置し、II層下で確認した。堆積層から土師器の破片7点と用途不明の鉄製品(45)が出土している。土師器は全て非ロクロのものである。

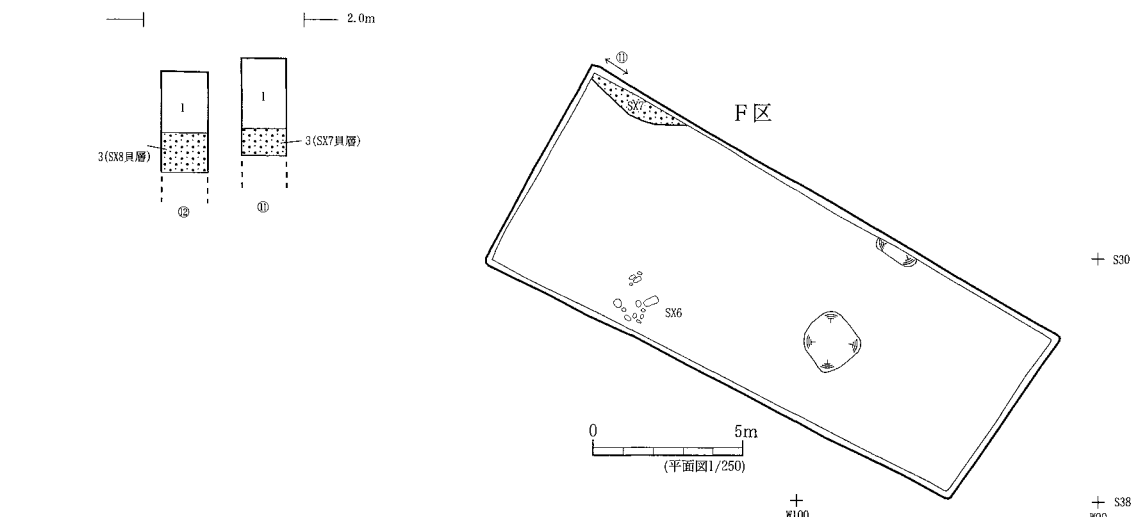
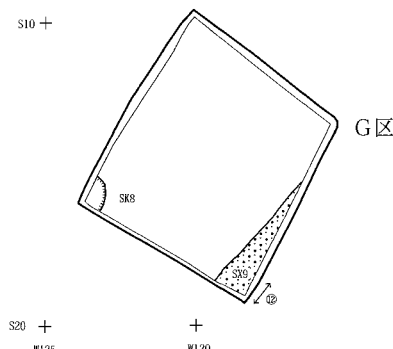
【SX9 貝層】 G区に位置し、II層下で確認した。層厚25cmほどの貝層である。堆積層から土師器坏(46)と土師器の破片15点が出土している。土師器は全て非ロクロのものである。貝には、マガキ、アサリ、イガイ、カリガネエガイ、ヤマトシジミ、ハマグリなどがある。このうち主体はマガキで、この他は少量である。

【SI10住居跡】 H区に位置し、II層下で確認した。一辺約4.5mの平面方形の竪穴住居跡である。堆積層から土師器壺(49)・甕(50)と土師器の破片2点が出土している。土師器は全て非ロクロのものである。

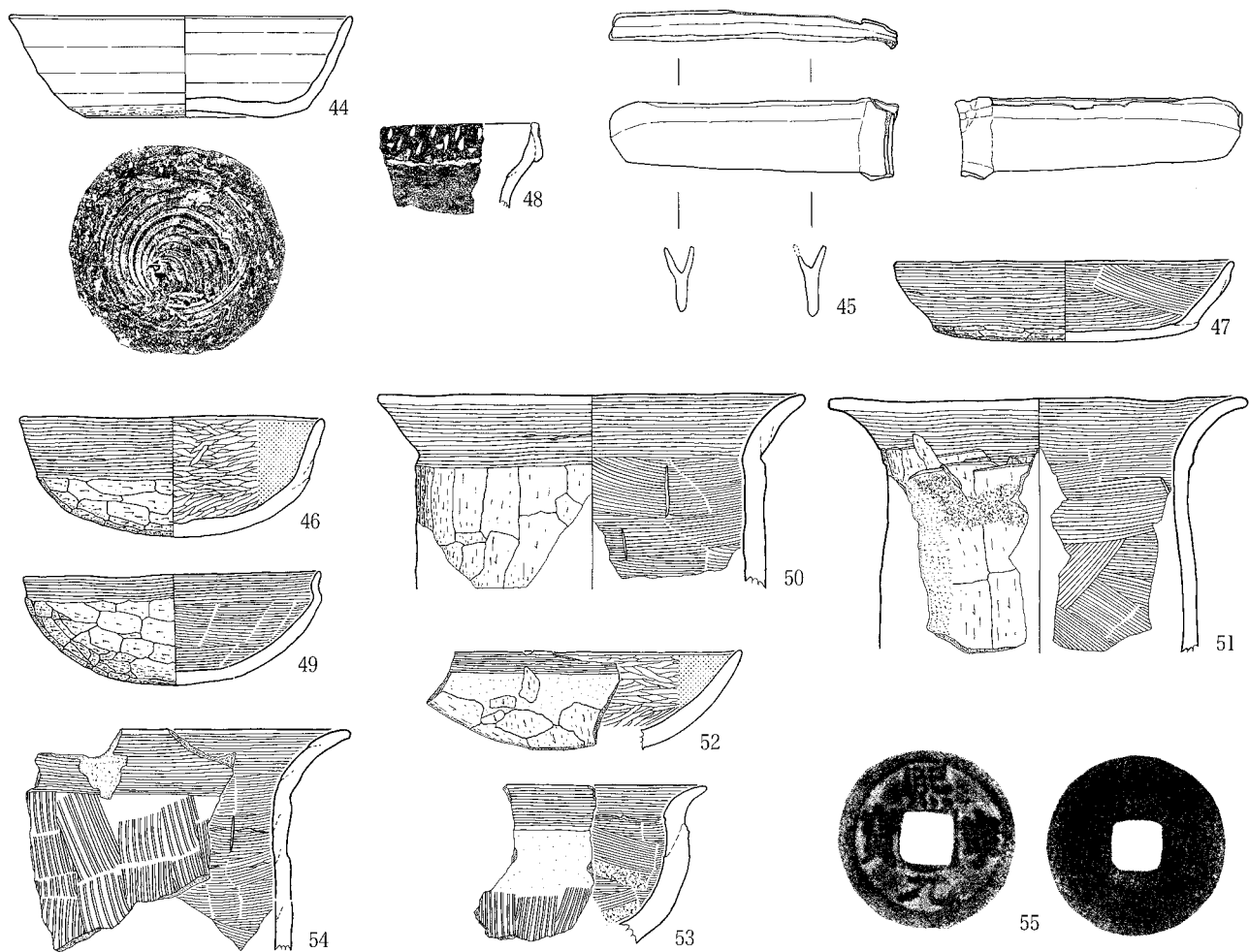
【SI11住居跡】 H区に位置し、II層下で確認した。一辺約4.0mの平面方形の竪穴住居跡である。カマド内堆積層から土師器甕(51)が出土している。甕は非ロクロのものである。



層	土色・土性	備考
1	黒色 (10YR1.7/1) 土	層上部は草や笹の根が多い。自然堆積層。【I層】
2	灰白色 (10YR8/1) 火山灰	均質で湿じりのない火山灰層。自然堆積層。【II層】
3	褐色 (10YR4/6) 貝層	貝を多く含む。【S X 7、S X 8、S X 12、S X 13、S X 14】
4	黒褐色 (10YR2/3) 砂質土	【A区II 2層～II 9層に対応】
5	褐色 (7.5YR4/6) 砂	しまりが弱い。自然堆積層。【III層】
6	暗褐色 (10YR3/3) 砂質土	固くしまる。自然堆積層。【III 2層】
7	褐色 (7.5YR4/6) 砂	砂の粒子は粗く貝の細片を特に多く含む。海砂。【III 4層】



第15図 F・G・H区遺構全体図



[縮尺は55が原寸、45が1/2、他は1/3。]

遺物	種類	出土遺構と層位	特徴	登録	箱番号
44	須恵器 環	F区 SX 6-掘方	残存3/5。器高4.2cm。口径(14.2)cm。底径7.5~7.8cm。胎土に砂粒を特に多く含む。〔外面〕体部下端に回転ヘラケズリ。底部は回転糸切り無調整。焼成後に刻書「尸」。灰色(10Y4/1)。〔内面〕灰色(10Y4/1)。	SX6-R1	13948
45	鉄製品	G区 SK 8-1層	鎌刃先のみ。全長7.9cm。	RM2	13556
46	土師器 坏	G区 SX 9-1層	残存2/3。器高5.0cm。口径(12.4)cm。丸底。海綿動物の骨針も僅かに含む。〔外面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。灰黄褐色(10YR5/2)。〔内面〕ヘラミガキ後に、黒色処理(10YR1.7/1)。	SX9-R1	13948
47	土師器 坏	G区 I層	残存1/4。器高3.3cm。口径(14.0)cm。丸底。〔外面〕口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。にぶい黄褐色(10YR5/4)。〔内面〕ナデ。にぶい黄褐色(10YR5/4)。	G区 I層-R1	13948
48	弥生土器 甕	G区 I層	口縁部二重。〔外面〕上部に縦方向2段、その下に横方向1段の交互刻突、下部横方向のナデ。黒褐色(10YR3/1)。〔内面〕ナデ。灰黄褐色(10YR4/2)。	G区 I層-R2	13948
49	土師器 塊	H区 SI 10-1層	残存1/2。器高4.6cm。口径(12.2)cm。丸底。口縁端部が短く屈曲し体部との境を形成。胎土に赤色砂粒を多く含む。〔外面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。明赤褐色(5YR5/8)。〔内面〕体部ナデ後に、口縁部ヨコナデ。明赤褐色(5YR5/8)。	SI10-R1	13948
50	土師器 甕	H区 SI 10-1層	残存1/4。口径(17.6)cm。〔外面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。黄褐色(10YR7/8)。〔内面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。黄褐色(10YR7/8)。	SI10-R2	13948
51	土師器 甕	H区 SI 11-かド1層	残存1/4。口径(17.2)cm。外面に炭化物(煤)付着。〔外面〕口縁部ヨコナデ後に、体部ヘラケズリ。赤褐色(5YR4/6)。〔内面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。赤褐色(5YR4/6)。	SI11-R1	13948
52	土師器 高坏	H区 SX 12-1層	坏部の破片。胎土に海綿動物の骨針を含む。〔外面〕口縁部ヨコナデ後に、坏体部ヘラケズリ。にぶい黄褐色(10YR5/4)。〔内面〕ヘラミガキの後に黒色処理(10YR1.7/1)。	SX12-R3	13948
53	土師器 鉢	H区 SX 12-1層	口縁部から体部の破片。内面に炭化物(焦げ)付着。〔外面〕体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。赤褐色(5YR4/6)。〔内面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。赤褐色(5YR4/6)。	SX12-R2	13948
54	土師器 甕	H区 SX 12-1層	口縁部から体部の破片。〔外面〕体部ハケメ後に、口縁部ヨコナデ。明黄褐色(10YR6/8)。〔内面〕体部ヘラケズリ後に、口縁部ヨコナデ。黄褐色(10YR7/8)。	SX12-R1	13948
55	北宋銭	H区 I層	熙寧元寶。初鑄1068年。直径25.0mm。文字部分の径20.4mm。孔の一边7.1mm。厚さ0.9mm。	RM3	13556

法量における()内の数値は、復元値。

第16図 SX 6、SK 8、SX 9、SI 10、SI 11、SX 12ほか、F・G・H区出土遺物

【SX12～14貝層】H区に位置し、II 1層下で確認した。層厚15cmほどの貝層である。SX12では堆積層から土師器高坏（52）・鉢（53）・甕（54）、土師器の破片20点が出土している。いずれも非ロクロの土師器である。貝には、マガキ、イガイ、アサリ、カリガネエガイ、クボガイ、キサゴなどがある。このうち主体はマガキで、他は少量である。

【F、G、H区のI層】丸瓦8点、瓦の破片1点、弥生土器（48）、土師器坏（47）と土師器の破片292点、製塩土器の破片8点、須恵器の破片25点、北宋銭（55）が出土している。須恵器と製塩土器は出土量そのものが少なく、土師器の出土量はG区が特に多い傾向にある。

5. 考察

第2次調査で出土した遺物は、丸瓦、平瓦、弥生土器、土師器、製塩土器、須恵器、砥石、鉄釘、北宋銭などがあり、遺物収納箱17箱分である。発見した主な遺構に、竪穴住居跡5棟（SI1、SI2、SI3、SI10、SI11）、焼成遺構1基（SX6）、土壇1基（SK8）、貝層6ヵ所（SX5、SX7、SX9、SX12、SX13、SX14）、SX4がある。これらの遺構のうち、SX4、SX6、SX7以外は10世紀前葉に降下した火山灰（II 1層）より下層で確認していることから、古代以前の遺構である。またSI1とSX5は後述する多賀城政庁遺構期第I期（以下多賀城I期と省略）の瓦を伴うことから、奈良時代前半以降のものである。これ以外の詳しい年代については、土器と須恵器の年代観から導く必要がある。そこでまず、第2次調査で出土した土器と須恵器から主要遺構の年代を考え、次に亀岡遺跡を特徴づける瓦と遺構のあり方について第1次調査の成果とあわせて考察する。

（1）出土土器と須恵器の特徴と遺構の年代

出土した土器と須恵器は遺物収納箱12箱分ある。内容は、弥生土器の破片3点、製塩土器鉢1点と破片約1/4箱、須恵器甕の上半部2点と破片約1/2箱のほか、大半が土師器である。

① 弥生土器

弥生土器3点は、交互刺突の甕口縁部（第16図48）、二重になり縄文を施文する甕口縁部（第14図34）、押圧文のある甕口縁部（第14図35）など、天王山式の土器群（註4）と共通し、弥生後期のものである。

② 土師器

高坏、碗、坏、鉢、壺、甕、甑の器形があり、量が多いこともあり古墳時代前期からロクロを使用した古代の土師器まで様々な年代のもので出土している（註5）。このうちSI1、SI2、SI3から出土した土器は、住居廃絶時のまとまりをもった良好な資料である。SX6、SX7、SX9、SX12からは遺構の上限年代を示す資料、SI10、SI11からは住居のおよその年代を推測させる資料がそれぞれ出土している。

S I 1の資料は、ロクロの坏（第9図11）、非ロクロの坏（10）、須恵器の器形を模倣した壺（13）、非ロクロで外面にハケメを残さない長胴甕（第10図16～19）などが年代を考える上で特徴となる。特に口径に比して底径が大きく、回転ヘラケズリを体部下端から底部全面に施す坏（11）の特徴は、8世紀末を境にロクロ土師器が普及する前の特徴を示している。このような大量に出現する前の器形を持つロクロ土師器坏は、宮城県利府町硯沢窯跡B 2住居跡、色麻町日の出山窯跡C地点第9号住居跡、福島県いわき市五反田A遺跡1号住居跡、3号住居跡、5号住居跡、1号溝、17号溝などから出土しており、同時に作られた瓦や須恵器の年代から、8世紀前葉から中葉頃の時期と考えられている（註6）。他の土器の特徴も同時期と考えられるものであり、本資料も8世紀前葉から中葉頃のものと考えることができる。

S I 2、S I 3の資料は、半円形で丸底の壙、頸部の小さい中型の壺、肩の張りが弱い長胴気味の甕などの特徴から、古墳時代中期後半のものである。また、赤彩を多用する点もこの時期の特徴をよく示している。

S X 9とS X 12から出土した土師器内黒坏（第16図46）と甕（54）は、口縁部と体部の境に明瞭な段を持つ特徴から、栗圀式から国分寺下層式にかけてのものである。この栗圀式から国分寺下層式の型式内容と年代については、型式設定時から曖昧な点が多く未だ年代の根拠も不明確であるが、坏（46）と甕（54）はその器形上の特徴からおおよそ古墳時代後期後半から奈良時代初頭頃（おおよそ7世紀から8世紀初頭頃）のものとみている。

またS I 10とS I 11から出土した土師器壙（49）と甕（50、51）は、銅壙の模倣形態や関東地方に起源（註7）を持つ一群で、宮城県内では栗圀式から国分寺下層式期にかけてよくみられるものである。壙（49）と同様に内面に黒色処理を行わない土師器坏は、G区I層からも1点（47）出土している。

S X 7からは、底部へ回転糸切り後に再調整を行わないロクロ土師器坏と短い受け口状の口縁部をもつロクロ土師器甕など、8世紀末頃以降の特徴をもつものが出土している。

この他、高坏（第14図36、40）、壺（41）、甕（37）は、古墳時代前期のものである。

③ 製塩土器

製塩土器は、薄手の鉢1点（第9図12）のほか全てが厚手の小破片である。いずれも瓦が含まれる層と遺構から出土している。鉢（12）は相伴する資料から8世紀前葉～中葉頃のものである。同様の器形は、塩竈市新浜遺跡第2号炉跡（註8）、鳴瀬町里浜貝塚3号竪穴住居跡（平成9年度調査）（註9）から出土している。厚手の小破片は、底部がわかるものは全て平底で、口縁部がわかるものは直立しそのまま立ち上がるもので、全体の器形を円筒形と推測している。その年代は、古代でも多賀城I期より新しい時期のものである。

④ 須恵器

須恵器は、S I 1から甕2点（第10図20、第11図21）、S X 6から坏（第16図44）、この他小破片が出土している。製塩土器と同様に、全て瓦が含まれる層と遺構から出土している。

坏（44）は、大きめの底径と体部の傾きかた、回転糸切り後に回転ヘラケズリを体部下端に行うなど、

8世紀後半頃（註10）の特徴をもつ。

⑤ 主要な遺構の年代

以上のような土器と須恵器の年代観から主要な遺構の年代を考えると、S I 1住居跡が8世紀前葉～中葉頃、S I 2・S I 3住居跡が古墳時代中期後半となり、S X 6焼成遺構が8世紀後半以降、S X 7貝層が平安時代、S X 9貝層、S X 11貝層が古墳時代後期後半から奈良時代初頭頃、S I 10とS I 11住居跡もS X 9やS X 11と同じ頃のものとなる。

（2）瓦の特徴と年代

第2次調査では、丸瓦74点、平瓦49点、判別のつかないもの32点、総数155点の瓦が出土した。出土地のほとんどがA区で、瓦のほぼ全容がわかるものは、S I 1住居跡から出土した丸瓦5点と平瓦3点、S I 1周辺のII 5層から出土した丸瓦1点のみで、ほかは全て破片である。このS I 1住居跡から出土した瓦群もカマドの壁材などに転用するために持ち込まれたものである。そこで、今回出土した瓦が本来どのようなまとまりをもったものかを考えるために、これまで亀岡遺跡で出土した瓦の傾向について、まとめて報告する。第1次と第2次調査で出土した瓦の特徴ごとの数量は第2表に示した。このほかに本遺跡から出土した瓦は、故内藤政恒氏が収集した軒丸瓦1点と軒平瓦1点が『東北古瓦図録』（註11）、昭和51年の体育館建設に伴い盛土から出土した瓦153点が『亀岡遺跡・金山貝塚』（註12）に報告されている。そこで軒瓦、丸瓦、平瓦の順に特徴をまとめ、最後に年代を述べる。

① 軒瓦

第1次調査で、軒丸瓦1点と軒平瓦1点が出土している。軒丸瓦は瓦当部分を欠損したもので、軒平瓦は手書きの二重弧文〔型番512〕で、凸面格子状の叩き目のある平瓦I C類が取り付くものである。

このほか『東北古瓦図録』で、6葉の重弁蓮華文軒丸瓦〔型番112〕1点、手書きの二重弧文軒平瓦〔型番512〕1点、『亀岡遺跡・金山貝塚』で瓦当部分を欠損した軒丸瓦2点の報告がある。瓦当部分を欠損した軒丸瓦のうち1点は8葉弁蓮華文軒丸瓦〔型番不明〕とされている（註13）。二重弧文軒平瓦〔型番512〕の平瓦部分は、平瓦I C類bタイプが取り付く。

② 丸瓦

丸瓦は104点出土している。作り方は凹面に残る糸切り痕と断面観察から、粘土板を基に加工する丸瓦I類のもののみ確認でき、粘土紐の積み痕跡をもつものはない。狭端部がわかるものは、全て玉縁がつかない丸瓦A類である。欠損が少なく丸瓦I A類と判断できるものは、14点のみ（第6図1～4、第7図5、第14図38、他）であるが、出土した丸瓦の全てがI A類の可能性が高い。

凸面の痕跡は原則として平行叩き目〔bタイプ〕である。なお一部の瓦に中央部分を中心に叩き目がナデ消されたもの（第6図2、第7図5、3）もあるが、凸面の痕跡がわかるものは破片も含め、全てに平行叩き目が認められる（註14）。この叩き目の方向は瓦の長軸に対し、中央部に横方向もしくは斜方向に行うものがほとんどであるが、2点のみ縦方向に行うもの（『亀岡遺跡I』第6図11、他）がある。

平行叩き目の突起部分の幅は前者が1mmなのに対し、後者は2mmと広い。凹面がわかるものは全て布目
が確認できる。また叩きに際して使用した調整台は、その側端が垂直に近く、丸瓦の横断面の形状がわ
かるものは全てU形である。

側端部は、ケズリ整形をしないものが多いが、凹面側のみを整形するものも一定量ある。

色調は、灰59点、白38点、黒灰1点、橙4点、褐灰1点、淡赤褐1点である。

胎土は、海綿動物の骨針が含まれているものが大半である。

このほか『亀岡遺跡・金山貝塚』で報告されている丸瓦も、玉縁を持つものがなく、横断面がU状に
なるものが報告されており、今回出土したものと同様の特徴をもつ。

—瓦の分類—

〔軒丸瓦〕 型番112：6葉の重弁蓮華文で、中房が円板状をなし、蓮子構成は1+4、周縁蓮子は円形で、周縁蓮子間に
区画のない軒丸瓦。

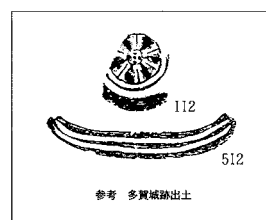
〔軒平瓦〕 型番512：二重弧文軒丸瓦。弧の両側端がやや上方に屈曲するもの。顎有り。

〔丸瓦〕 I A類：粘土板巻き作りによる無段丸瓦

aタイプ 第2次叩き目が無文叩き目のもの

bタイプ 第2次叩き目が平行叩き目のもの

cタイプ 第2次叩き目の上に縦方向のヘラケズリを施すもの



〔平瓦〕 I A類：桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後に、凹面→凸面の順にナデ調整したもの

I B類：桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後に、凸面をナデ調整したもの

I C類：桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後に、凸面を叩き調整したもの

aタイプ 断面形が円弧状をなすもの

bタイプ 断面形がU状をなすもの

I D類：桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後に、凹面をナデ調整したもの

—瓦の分類は、宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』（1982）による—

瓦の種類と特徴	出土地点	A区											B区	C区	D区	E区	F区	G区	H区	計						
		S I I			S X 5 貝層 (1次)	II 6 層	II 5 層	II 4 層	II 3 層	II 2 層	II 1 層	I 層	攪乱 他	貝 層 (1次)	盛 土	盛 土	貝 層 (1次)	I 層	I 層		I 層					
		床・ カマド	柱 痕跡	堆 積層																						
軒丸瓦																					1					
軒平瓦【512番+I C類】										1											1					
丸瓦	凸面平行叩き目、凹面布目	6		1	1	1		17	1	7	2	3	34		2		1		1		5	2		84		
	凸面もしくは凹面が欠損						1	10		2	1	1	4										1	20		
平瓦	I A類			1								1	3					1						6		
	I B類											1	8											9		
	I C類	9	1	1				9		4		5	41	3					1					74		
	I D類									1			8											9		
	凸面もしくは凹面が欠損			1				5	2	2	1	7	8		1	1								28		
瓦小破片			1				27	1			2	8			1						1			41		
計		15	1	5	1	1	1	68	4	16	4	21	114	3	3	2		1	2	2		0	6	2	1	273
		254											5		1	4										

第2表 瓦の分類と第1次～第2次調査で出土した瓦の特徴ごとの数量

③ 平瓦

平瓦は126点出土している。このうち、瓦の全容がわかるものが5点（第7図7、第8図8と9、『亀岡遺跡Ⅰ』第5図5と6）ある。これは、平瓦ⅠC類bタイプでいずれも凸面格子叩き目のものである。

凸面と凹面の調整痕跡ごとにその特徴を見ると、平瓦ⅠA類が6点、平瓦ⅠB類が9点、平瓦ⅠC類74点、平瓦ⅠD類9点である。このうち大半を占めるⅠC類の凸面は、ほとんどが斜格子で、ほかに正格子が混じるもの1点（『前書』第6図15）と縄叩き目と平行叩き目の異原体が重複するもの1点（『前書』同図13）がある。また破片の制約から断定できないものを除くⅠC類の断面形は、全て一状の形態のbタイプである。ⅠD類の凸面は平行叩き目もしくは矢羽根状叩き目である（註15）。

側端部は、凸面側のみをケズリ整形するものが多い。

色調は、灰71点、白39点、橙12点、褐灰4点である。

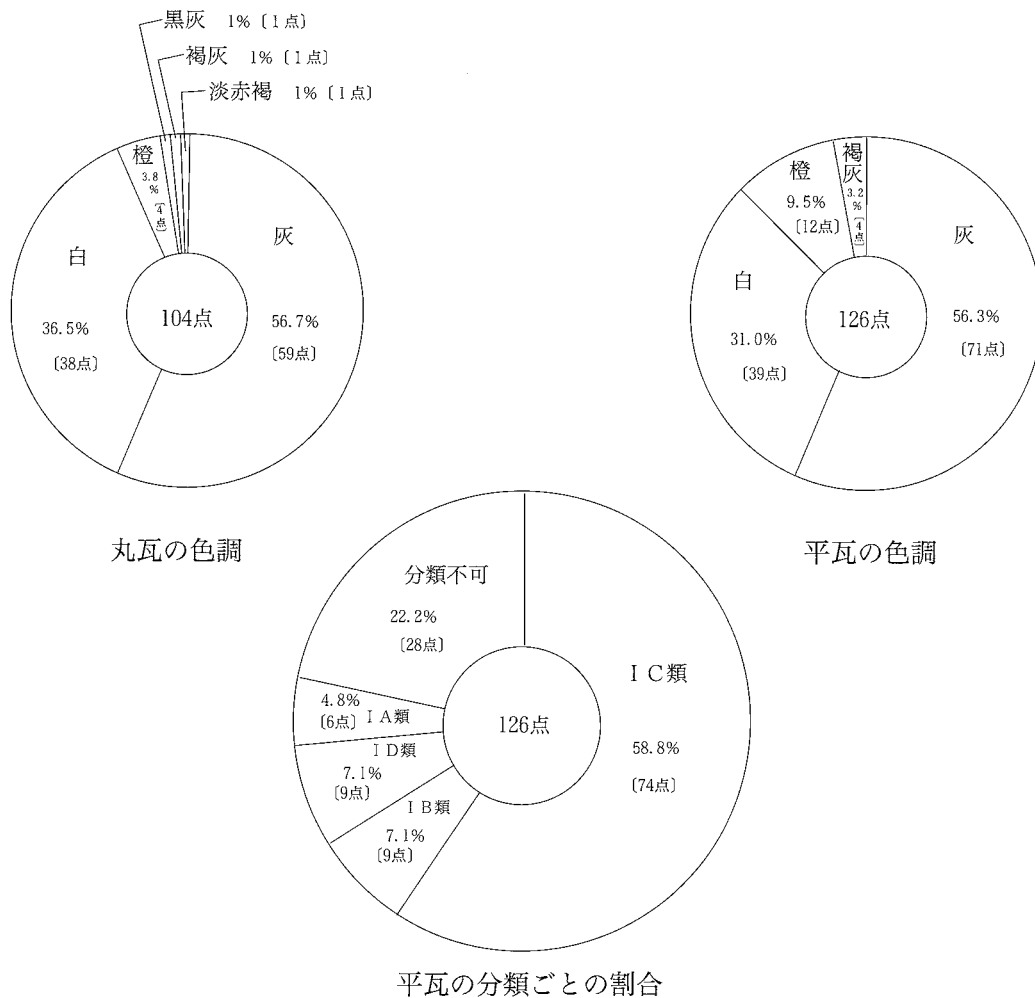
胎土は、海綿動物の骨針が含まれているものが大半であるが、ごく少数含まないものも有り、ⅠD類は共通して含まない傾向にある。

このほか『亀岡遺跡・金山貝塚』で報告されている平瓦も凸面格子叩き目のものが主体であることが報告されており、図示しているものには、ⅠC類bタイプのものがある。なお、平瓦第2類とした凸面平行タタキ目のものには丸瓦が含まれており、出土した平瓦に占めるⅠC類で凸面格子叩き目のものの割合は相当高いとみられる（註16）。

④ 瓦の年代と下伊場野窯跡A地点出土瓦との比較

これまでに亀岡遺跡から出土もしくは採集されている軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦は、いずれも多賀城Ⅰ期に位置づけられる瓦群である。この亀岡遺跡の資料は、量的にも、また出土状況も、良好なものとはいえないが、その内容については丸瓦ⅠA類、平瓦ⅠC類が大半を占めるまとまりのあるものとなっている。また丸瓦ⅠA類と平瓦ⅠC類は特異な調整台を使用し側端部のあり方に特徴をもち、多賀城Ⅰ期の瓦の中でも個性の強いものであり、その位置付けをより詳しく考える必要がある。そこで亀岡遺跡の瓦を数の上でも代表する丸瓦ⅠA類と平瓦ⅠC類を基に、これまでに報告されている多賀城Ⅰ期の窯跡群の内容にあたり、松山町下伊場野窯跡A地点（註17）で両者を焼成していることが目につく。すでに同遺跡報告書中では、下伊場野窯跡A地点の資料は、同じ多賀城Ⅰ期の窯跡群の中でも、木戸窯跡群や日の出山窯跡群など（註18）より古く、亀岡遺跡出土瓦と関連が強いことが指摘されている。また須恵器坏の特徴も、多賀城Ⅰ期の中でも古相を示すと報告している。亀岡遺跡出土瓦は、丸瓦ⅠA類と平瓦ⅠC類を共有することから、下伊場野窯跡A地点の瓦群と共通し、すでに指摘されてきたように多賀城Ⅰ期の中でもより古いものの一つと考えることが可能である。軒平瓦においても、下伊場野窯跡A地点から鋸歯文のない方形の顎部の二重弧文軒平瓦（『下伊場野窯跡』軒平瓦第5類）に平瓦ⅠC類aタイプを接合したものが出土しており、同様の瓦当に平瓦ⅠC類bタイプを接合する二重弧文軒平瓦〔型番512〕が亀岡遺跡の瓦群にあることから、両者の結びつきが深いことを窺える。

一方、このように大きくは共通する要素をもつ下伊場野窯跡A地点出土の瓦とも、細かくみると次の1)～4)の点で異なる。



第17図 瓦の分類と瓦の特徴ごとの比率

1) 異なる様式の軒丸瓦が出土している。

亀岡遺跡からは6葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番112〕と8葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番不明〕、下伊場野窯跡A地点からは、8葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番116〕〔型番114カ〕が報告されている。この6葉と8葉の重弁蓮華文軒丸の違いは大きく、様式を異にするものである。

2) 丸瓦のバリエーションが異なる。

亀岡遺跡出土丸瓦はI A類の中でもbタイプに限られるのに対し、下伊場野窯跡A地点の丸瓦には、I A類のほか、玉縁をもつI B類、II B類が加わりその種類が豊富である。特に丸瓦II B類は粘土紐巻き作りで、製作技法も全く異なるものである。また亀岡遺跡の丸瓦I A類は端部の立ち上がりが直線に近く、下伊場野窯跡A地点の丸瓦I A類とは異なる形態の調整台を使用している。

3) 平瓦I C類の中での、細別タイプが異なる。

平瓦I C類の中で全容がわかるものは、亀岡遺跡出土のものが全てbタイプであるのに対し、下伊場野窯跡A地点出土のものはaタイプである。この亀岡遺跡出土のbタイプは、断面形の端部の湾曲が強く、平面形も正方形に近いものである。これに対し下伊場野窯跡A地点出土のaタイプは、断面形が円弧をえがき、平面形も長軸が長い台形である。さらに後者は凹面側端部へのケズリ

が顕著で原則として狭端部と広端部に及び、模骨痕の痕跡も明瞭であるという前者にない特徴をもつ。この両者の違いは、調整台の形状の違いと製作技法の違いを反映している。

4) 文字瓦の有無。

下伊場野窯跡A地点の瓦には、「今」「常」「下今」を調整台に彫り込み生じた陰刻のもの、「土マ 佰嶋」「小田郡口子マ建万呂」をへう書きしたものが出土しているのに対し、亀岡遺跡では文字瓦の出土例がない。

	亀岡遺跡の瓦	下伊場野窯跡A地点出土の瓦
軒丸瓦	6葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番112〕 8葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番不明〕	8葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番116〕 8葉重弁蓮華文軒丸瓦〔型番114カ〕
軒平瓦	二重弧文軒平瓦〔型番512〕	二重弧文軒平瓦〔型番511〕 『下伊場野窯跡』第V類（二重弧文軒平瓦〔型番512〕の一種カ）
丸瓦	I A類bタイプ	I A類bタイプ、『下伊場野窯跡』第I類bタイプ I B類（粘土板巻き作り後に玉縁を削り出す） II B類
平瓦	I C類bタイプ（凸面格子叩き目）が 主体 I A類、I B類、I D類も僅かに出土	I B類 I C類aタイプ（凸面は、縄、格子、平行、矢羽根状の各叩き目が混在）のみ

第3表 亀岡遺跡の瓦と下伊場野窯跡A地点出土瓦の比較

この両者の違いをより後出と考えられる窯跡の資料を介在させて考えると、下伊場野窯跡A地点出土の瓦群が丸瓦II B類の存在や平瓦I C類aタイプの形態上の特徴と端部への調整技法のあり方で、日の出山窯跡C地点などへ繋がる要素をもつものに対し、亀岡遺跡の瓦群には新しい要素が含まれていないことが指摘できる。そのため両者の差は、時間差によって生じたと解釈することが可能である。さらにこのように考えると、亀岡遺跡で採集された6葉の重弁蓮華文軒丸瓦の様式が他の多賀城の軒丸瓦に継承されない独自性の強いあり方を示すことも、特異な調整台を使用した亀岡遺跡の丸瓦I A類と平瓦I C類の側端部のあり方も、独自の系譜に由来する現象と理解することができる。つまり亀岡遺跡の瓦群は、下伊場野窯跡A地点の瓦群と大きくは共通するものの、細かくみるとより古い様相を示し、現在知られている多賀城I期の瓦群でも特に古い特徴をもつあり方を示すものである。

(3) 遺跡内の遺構のあり方

2次にわたる発掘調査で、遺跡内に8カ所の調査区を設け、約1300㎡を調査した。その結果判明した遺跡内の遺構や遺物のあり方について、A～C区を設定した小学校体育館周辺、E～G区を設定した西の畑地とその周辺に区別し、説明する。なお調査の目的であった、瓦葺きの建物は未発見である。このことについては、今後手がかりが得られた段階で、調査を行う必要があると考えている。

① 小学校体育館周辺

体育館北西にあたるA区中央から北側のみで、10世紀前葉に降下した灰白色火山灰層とそれ以前の自然堆積層であるII層が分布し、古墳時代中期の住居跡2棟と8世紀前葉から中葉頃の住居跡1棟、古代

の貝層2ヵ所を確認している。また本遺跡から出土した瓦のほとんどが、この地から出土している。この瓦が集中して出土する理由については、8世紀の住居跡でカマドの材料として転用目的で持ち込まれたことが判明した。このほか瓦は、細片が多く、自然堆積層の各層に散在することから、波力などで流れ込み溜まったことも考えられる。後者の可能性については、調査区南よりと東端で発見した貝層がいずれも2次堆積(註19)したもので、瓦を含み、灰白色火山灰の下層にあたることから補強できる考えである。なお遺跡周辺の標高30mほどの丘陵上も数度踏査を行っているが、瓦に関する手がかりを得ていない。瓦の摩滅が顕著でないことから比較的周囲に本来瓦を利用した施設があったと考えているが、現在得られている情報の中では、その場所を特定することはできない。

またA区南側では、海砂に起因するⅢ4層がⅠ層直下で広がる。さらに南にあたるB・C区は、Ⅲ4層上面が南に向かい低くなり、海水によりえぐられたとみられる段差や中世以降の貝層が堆積することから、少なくとも中世以降は海岸や海の一部である。古代の遺構が形成されたり、遺存している可能性は極めて低いと考えられる。

なお昭和11年に瓦が出土した地点は、記録内容からA区周辺と考えている(註20)。2次調査で発見したSX4は過去の発掘区の可能性をもつものであるが、これが昭和11年の調査区である確証はない。

このほかに隣接する野蒜亀岡貝塚は、縄文晩期の遺跡として登録されている。また僅かながら弥生時代後期や古墳時代前期の土器も出土しており、これらの時期の遺構もA区周辺に存在する可能性がある。

② 西の畑地とその周辺

北側の丘陵側の畑地であったF・G・H区では、古墳時代後期後半頃から古代にかけて、住居跡2棟、貝層5ヵ所、焼成遺構1基など、貝層を伴う集落が形成されていた。これより僅かに南に位置するD・E区では古代の遺構が分布せず、Ⅲ層上面も南に向かって標高が一段と低くなる。古代及びそれ以前の集落は現在の遺跡範囲の北側に限られ、中央より南側は近世の墓や近現代の貝層が分布する。この一帯も19世紀末に東名運河が開削される前は、海岸の一部であった可能性が高い。

なお瓦は、D～H区からあわせて13点出土している。いずれも小破片で摩滅が著しいことから、瓦葺きの建物はこの地の外にあったと考えている。

このほかこの地区では、僅かながら弥生時代後期と中近世の土器や陶磁器、北宋銭も出土している。これらの時期の遺構も周辺に存在する可能性がある。

6. まとめ

1. 亀岡遺跡内に4ヵ所の調査区を設け、約830㎡の発掘調査を実施した。発見した主な遺構は、A区で8世紀前葉から中葉頃の住居跡1棟、古墳時代中期後半の住居跡2棟、古代の貝層1ヵ所、F区で古代の貝層1ヵ所と焼成遺構1基、G・H区で古墳時代後期後半から奈良時代初頭頃の貝層4ヵ所と同時期とみられる住居跡2棟である。

2. 出土した古代の遺物に、丸瓦、平瓦、弥生土器、土師器、製塩土器、須恵器、土製支脚、砥石がある。丸瓦と平瓦は多賀城政庁跡遺構期第Ⅰ期、弥生土器は弥生後期、土師器は古墳時代前期から古代、製塩土器、須恵器、土製支脚、砥石は古代のものがある。
3. 古代の瓦は、その大半がA区とした野蒜小学校体育館周辺から出土している。この場所では、カマド壁材に瓦を再利用した8世紀の住居跡を発見したが、本来瓦が葺かれていた建物などの遺構は未確認である。

(註)

- (註1) 本遺跡で検出した灰白色火山灰は、10世紀前葉頃に東北地方一帯に降下したものと同一とみている(宮城県多賀城跡調査研究所『亀岡遺跡Ⅰ』2002年、19頁補註1)。
- (註2) 「調査と記録の方法」(宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政庁跡本文編』、1982年)70-74頁。
- (註3) 製塩土器は器の分類上土師器に含まれるものであるが、他の土師器との違いを明確にするために、説明の都合上、敢えて区別している。
- (註4) 天王山式土器の内容については、坪井清足「福島県天王山遺蹟の弥生土器—東日本弥生文化の性格—」(『史林』第36巻1号、史学研究会、1953年、50-63頁)、弥生時代研究会「天王山式期をめぐって」の検討会記録集(1990年)、相澤清利「宮城県における弥生後期の土器編年」(『弥生時代後期の土器編年』第2分冊 第9回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム資料、2000年、962-969頁)、相原淳一「天王山式土器成立期に関する層位学的再検討」(『宮城考古学』第4号、宮城県考古学会、2002年、28-48頁)、相澤清利「東北地方における弥生後期の土器様相—太平洋側を中心として—」(『古代文化』第54巻第10号、財団法人古代学協会、2002年、28-48頁)などを参考にした。
- (註5) 土師器の年代観は、氏家典『東北古代史の基礎的研究』(東北プリント、1989年)、加藤道男「宮城県における土師器研究の現状」(『考古学論叢Ⅱ』寧楽社、1989年、277-329頁)。古川一明・白鳥良一「土師器の編年 東北地方」(『古墳時代の研究6—土師器と須恵器—』雄山閣出版株式会社、1991年、108-120頁)などによる。
- (註6) 宮城県教育委員会・宮城県道路公社『硯沢・大沢窯跡ほか—仙台—松島道路建設関係遺跡調査報告書—』(宮城県文化財調査報告書第116集、1987年)、色麻町教育委員会『日の出山窯跡群—詳細分布調査とC地点西部の発掘調査—』(色麻町文化財調査報告書第1集、1993年)、いわき市教育委員会・日本道路公団・財団法人いわき市教育文化事業団『五反田A遺跡—古代陶工集落・近世屋敷跡の調査—』(いわき市埋蔵文化財調査報告書第57冊、1999年)。
- (註7) 宮城県教育委員会『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』(宮城県文化財調査報告書第77集、1981年)、所収の「清水遺跡」V群土器 土師器Ⅱの説明、334-337頁。
- (註8) 宮城県教育委員会『塩釜市新浜遺跡』(宮城県文化財調査報告書第113集、1986年)、第20図I5・16。
- (註9) 鳴瀬町教育委員会『里浜貝塚—平成9年度発掘調査概報—』(鳴瀬町文化財調査報告書第3集、1998年)、第21図3。
- (註10) 須恵器の年代観は、岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」(『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所、1974年、65-92頁)、白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」(『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所、1980年、1-38頁)などによる。
- (註11) 原田良雄編集、石田茂作監修『東北古瓦図録』(雄山閣出版株式会社、1974年)。
- (註12) 鳴瀬町教育委員会『亀岡遺跡・金山貝塚』(『宮城県鳴瀬町文化財調査報告書第1集、1977年)。
- (註13) 『亀岡遺跡・金山貝塚』18頁で間弁の部分が残る軒丸瓦が報告されている。宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡政庁跡本文編』(1982年)では8葉の重弁蓮華文軒丸瓦としている(341頁)。
- (註14) 凸面中央部を中心として、部分的に縦方向で叩き目がナデ消されたものもある。これはcタイプのケズリ(宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡政庁跡 図録編』1980年、P L86 a 1とP L86 b 1)とも異なり、凸型台に乗せ固定した際に生じた痕跡とみている。

- (註15) 平行叩き目と矢羽根状叩き目の違いは、特に小破片では判断が難しい。『亀岡遺跡Ⅰ』で平瓦ⅠD類とした8点(第6図4ほか)は矢羽根状叩き目と報告したが、平行叩き目と矢羽根状叩き目の両者の可能性があるものである。
- (註16) 註12の文献、第6図2と3。
- (註17) 下伊場野窯跡群A地点(宮城県多賀城跡調査研究所『下伊場野窯跡群』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊、1994年)の内容を『多賀城跡政庁跡 本文編』の分類を用いて再度確認すると、軒瓦は重弁蓮華文軒丸瓦〔型番116〕〔型番114カ〕、二重弧文軒平瓦〔型番511〕〔型番512の一種カ〕が出土している。丸瓦ではⅠA類bタイプとⅡB類の他に粘土板巻き作り後に玉縁を削り出す丸瓦(以下ⅠB類、『下伊場野窯跡群』第2類)がある。またⅠA類に包括される内容に、凸面に縄叩き目が行われるもの(『下伊場野窯跡群』第1類bタイプ)がある。平瓦にはⅠB類とⅠC類のものがある。このⅠB類の凸面は、ナデを行う前の縄叩き目の痕跡が残るものが多い。ⅠC類の断面形がわかるものは、aタイプに限られる(報告書92頁でbタイプとしたことを訂正する)。
- (註18) 木戸窯跡の瓦については宮城県教育委員会「木戸瓦窯跡」(『宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)』宮城県文化財調査報告第40集、1975年、141-144頁)、田尻町『田尻町史上巻』(1982年)、田尻町教育委員会「木戸窯跡群」(『新田柵跡推定地3ほか』田尻町文化財調査報告第5集、2001年、130-146頁)、日の出山窯跡A地点は宮城県教育委員会『日の出山窯群―埋蔵文化財緊急調査概報―』(宮城県文化財調査報告第22集、1970)、C地点は色麻町教育委員会『日の出山窯群―詳細分布調査とC地点西部の発掘調査―』(色麻町文化財調査報告第1集、1994年)、大吉山窯跡群については古川市教育委員会『史跡大吉山瓦窯跡保存管理計画』(1979)で紹介されている。このほか『多賀城跡政庁跡 本文編』でふれている各窯跡出土資料の内容も参考にしている。
- (註19) 第1次調査で発見したA区貝層も、再検討した結果、SX5同様に2次堆積の貝層である可能性が高いと考えている。
- (註20) 宮城県多賀城跡調査研究所『亀岡遺跡Ⅰ』(多賀城関連遺跡発掘調査報告書第28冊、2003年)、24-25頁。

IV. 多賀城関連遺跡第6次5カ年計画のまとめ

多賀城跡調査研究所では、多賀城跡の継続的な調査と同時に、多賀城を中心とする当地方の古代史を多角的に究明することを目的として、県内の城柵及び官衙遺跡等の多賀城に関連する遺跡を対象に、5カ年計画を立案し調査を行っている。

第6次5カ年計画（2頁の第1表）は、1年次から3年次を河北町と桃生町に跨る桃生城跡、4年次と5年次を鳴瀬町亀岡遺跡の発掘調査とした計画を立て、計画に沿って調査を実施した。そこで実施状況とその成果を総括し、第6次5カ年計画のまとめとする。

【桃生城跡（1年次から3年次）】（第18図）

桃生城跡第8次、第9次、第10次調査を行った。調査の目的は、城内西域の解明である。特に第7次調査で政庁西側官衙地区を調査し、調査区の西端で大型建物の一部を発見しており、この発見した建物の規模を把握し、第6次と第7次で継続した政庁西側官衙地区の遺構変遷を捉える必要があったことと、『続日本紀』宝亀5年7月壬戌条に海道の新羅が桃生城西郭を破るとあることから、特に注目されてきた桃生城西側の調査の必要性を指導委員会で指摘されてきたことを受けての調査である。各次の調査概要と成果は次のとおりである。

〔第8次調査〕

政庁西側官衙地区を対象に、約1200㎡を発掘した。その結果、この地区を区画する大溝と城内最大級の大型建物を中心とする建物4棟と、その建物を前後する時期に造られた竪穴住居跡2棟などを調査した。報告書では、これらの遺構の調査成果とあわせて、第6次から3次にわたり継続した政庁西側官衙地区の遺構変遷をまとめ、報告している。

〔第9次調査〕

城内西丘陵北半を対象に、約1400㎡を発掘した。その結果、城内築地塀とそれに取り付いた櫓跡、竪穴住居跡2棟などを調査した。報告書では、これらの調査成果に加え、桃生城関係の文献史料を集成し掲載している。

〔第10次調査〕

城内西丘陵南半を対象に、約600㎡を発掘した。その結果、この地区では桃生城が機能していた時期の遺構がなく、それ以前の7世紀頃の竪穴住居などを発見している。報告書では、これらの調査成果に加え、第1次から第10次調査で発見した遺構の内容をまとめている。

この第8次から第10次調査によって、城内西側北半の区画施設の構造が築地塀と大溝であり、南半は

区画溝はあるが、築地塀や土塁などの構造物が存在しないこと、城内西官衙地区では大型建物と小型建物によって構成される実務官衙域が形成されるのに対し、城内の西丘陵では桃生城が機能していた時期の遺構がほとんどないことなど、これまで未解明であった桃生城の西域について多くの知見を得ることができた。また桃生城跡の継続した調査を終了させるにあたっては、河北地区教育委員会と協力し、遺跡の案内板を新たにし、遺跡の概要を記したパンフレットを作成し遺跡周辺の全戸に配布するなど、遺跡保護への啓発も行っている。懸案の遺跡が所在する自治体による調査の継続と史跡指定については、調査終了までには実らなかったが、今後も粘り強く働きかけていく必要がある。

なお第10次調査終了後の平成15年に、県文化財保護課が三陸自動車道建設に先立つ発掘調査を行い、これまで桃生城の北東隅と考えてきたS F11の東で、桃生城の区画に関わるとみられる大溝を発見している。当研究所では10次に及ぶ調査で、すでに遺跡範囲は明らかになったと考えてきた。しかしこの発見により桃生城の規模が従来より東に広がり、これまで東辺とみてきた施設についても城内の区画施設の一部である可能性が浮上してきた(第18図)。桃生城跡の東側についてはその南半も含め、再度検討すべき課題である。

【亀岡遺跡（4年次と5年次）】（第3図）

亀岡遺跡第1次と第2次調査を行った。亀岡遺跡は鳴瀬町野蒜字亀岡（多賀城の北東約16km）に所在する。この遺跡は多賀城創建期の瓦が多量に出土することから、多賀城と密接に関連する官衙跡もしくは寺院跡と考えられてきた遺跡である。これまでの調査に、昭和11年（1936）の内藤政恒氏と伊東信雄氏の部分的発掘、昭和51年（1976）鳴瀬町教育委員会（担当県文化財保護課）の発掘調査があるが、遺構の分布や範囲、遺跡の具体的な内容についてはつかめていない。そこで2カ年の予定で、瓦が出土する遺跡の内容を解明するために調査を実施した。同遺跡の調査計画は、第1次5カ年計画策定時から予定していたが、その後何度か調査予定にあがりながらも様々な事情で先送りしてきたものである。

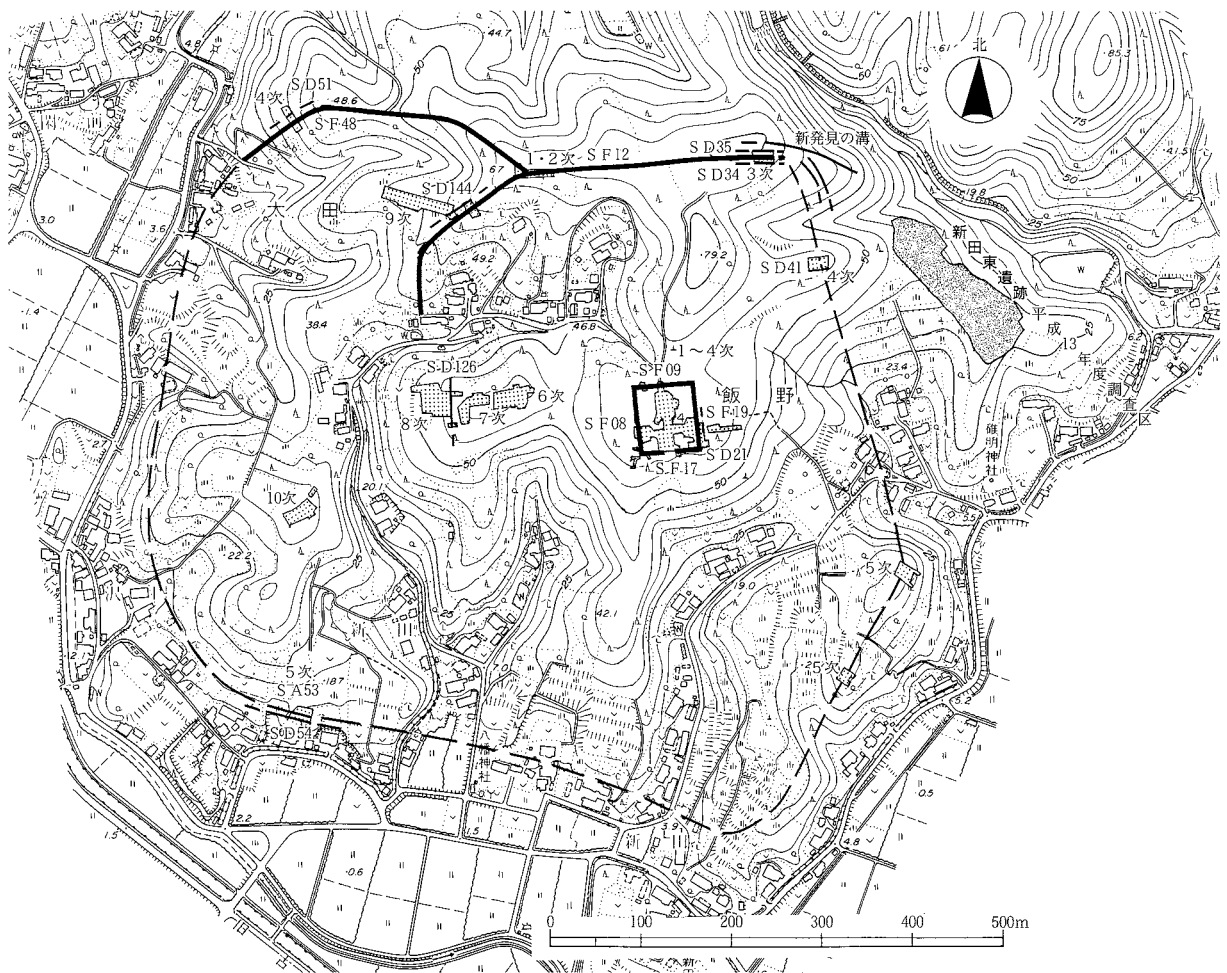
〔第1次調査〕

遺構の広がりや遺跡の性格を解明する手がかりを得るために、現在地点が判然としない昭和11年に調査が行われた旧校長官舎周辺など5カ所に調査区を設定し、遺構の分布状況の把握に努めた。その結果、野蒜小学校体育館北西で瓦が集中すること、遺跡範囲の中央より南側には古代の遺構が分布しない可能性が高いことなどがわかった。その調査成果は、報告書で報告している。遺跡とその周辺の地形図（1/1000）は、平成5年に作成しており、この地形図を基に一部加筆や修正を加え、図面を整えている。

〔第2次調査〕

第2次調査は第1次調査の成果を受け、瓦が集中する小学校体育館北西と、土器が最も散布する遺跡西側の畑地を調査した。その結果、小学校体育館北西では瓦を持ち込んだ住居跡1棟と古墳時代中期の住居跡2棟などを精査し、遺跡西側の畑地には、古墳時代後半から古代の貝層を伴う大規模な集落を確認した。その成果については、本書で報告している。

このように、亀岡遺跡での2次にわたる調査で、遺跡内の様相について一定の成果を上げることができた。しかし最も関心がある、本来瓦がどのように使われていたのか、どのような瓦葺きの建物があるのかについて、明らかにすることはできない。また発掘調査とあわせて周辺の踏査や地元での情報収集にも努めているが、瓦に関する新たな知見を得るに至っていない。そのため、このままの状態では調査を継続させて有益な成果を得るのは困難であり、新たに有効な手がかりが得られた段階で再度調査を検討する必要があると考えている。

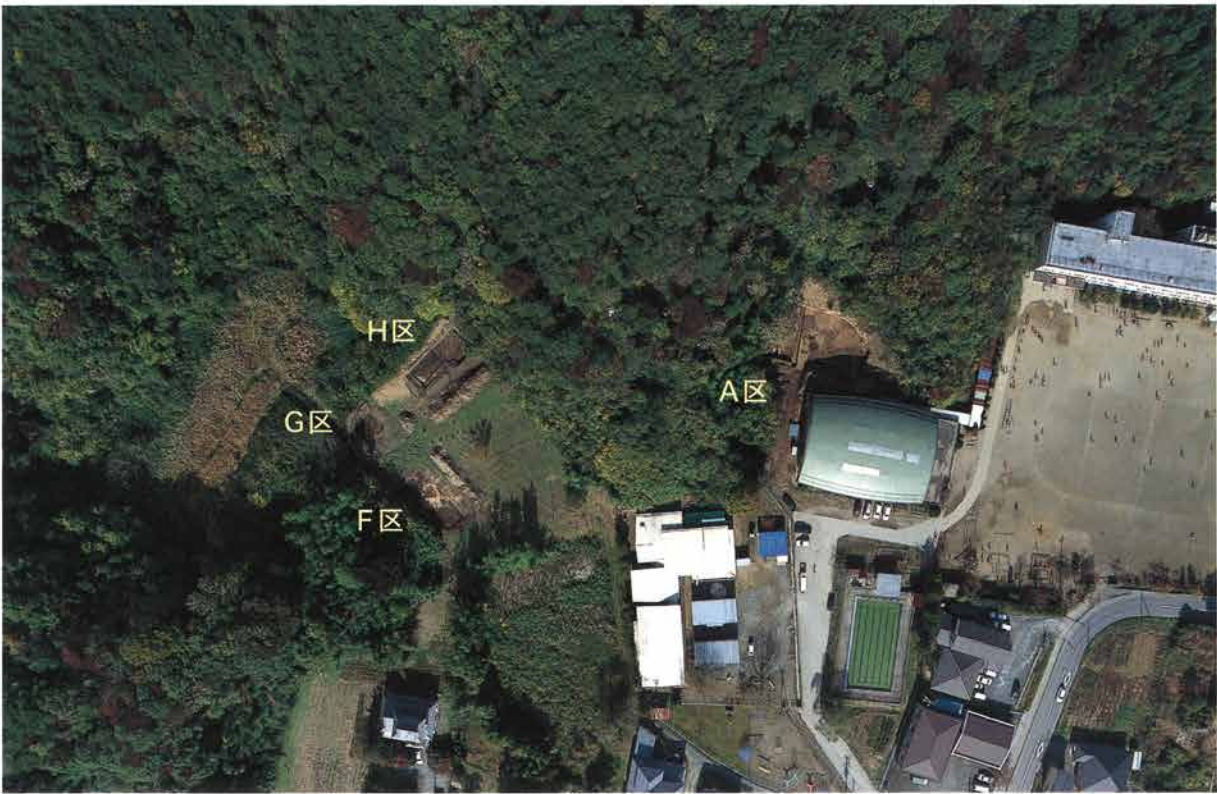


第18図 桃生城跡全体図

写真図版



1. 亀岡遺跡全景（南西上空から）〔フィルムE1799〕



2. 第2次調査A・F・G・H区全景（南上空から）〔フィルムE1801〕

写真図版 2



3. A区S I 1、S I 2住居跡（南東から）

〔フィルムE1806〕



4. S I 1住居跡（南から）〔フィルムE1807〕



5. S I 1住居跡カマド

（南から）〔フィルムE1810〕



6. S I 1住居跡遺物出土状況

（南から）〔フィルムD23734〕



7. S I 2 住居跡 (南東から) [フィルムD23738]



8. S I 2 住居跡カマド
(南東から) [フィルムE1814]



9. S I 3 住居跡 (南から) [フィルムE1815]



10. S I 3 住居跡カマド
(南から) [フィルムD23743]



11. S X 4 (南から)
[フィルムD23745]



12. S X 5 貝層 (西から)
[フィルムD23749]



13. A区調査区基本層序
(東から)
[フィルムD23750]



14. F・G・H区全景
(南から)
〔フィルムE1820〕



15. F区全景 (北から) 〔フィルムE1821〕



16. G区全景 (北から)
〔フィルムE1823〕



18. SX6 (西から)
〔フィルムD23758〕



17. H区全景 (東から) 〔フィルムE1824〕



19. SI10、SI11 (東から)
〔フィルムE1827〕



20. S I I 住居跡出土丸瓦(1) -S I I-R 1-



21. S I I 住居跡出土丸瓦(2) -S I I-R 2-



22. S I I 住居跡出土丸瓦(3) -S I I-R 3-



23. S I I 住居跡出土丸瓦(4) -S I I-R 4-



24. S I I 住居跡出土丸瓦(5) -S I I-R 5-



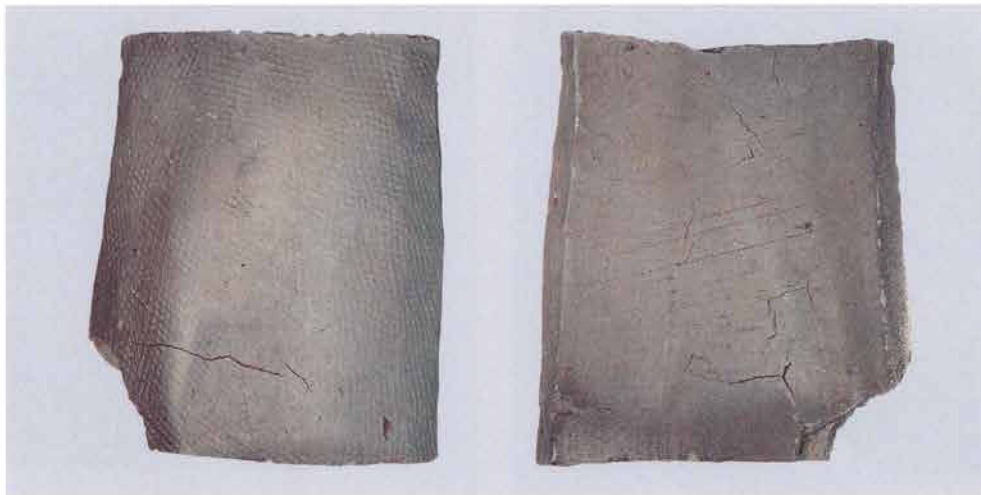
25. II 5層出土丸瓦 -A区II 5層-R 1-



26. S I I 住居跡出土平瓦(1) -S I I-R 8-



27. S I I 住居跡出土平瓦(2) -S I I-R 7-



28. S I I 住居跡出土平瓦(3) -S I I-R 9-



29. S I 1 住居跡出土土器・支脚
〔フィルム E1828、E1831〕



30. S I 2 住居跡出土土器〔フィルム E1833〕



32. S K 8 出土鉄製品
—RM2—



31. S I 3 住居跡出土土器〔フィルム E1834〕

報告書抄録

ふりがな	かめおかいせき2							
書名	亀岡遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	多賀城関連遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第29冊							
編著者名	吾妻 俊典							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22番1号 TEL022-368-0102							
発行年月日	西暦2004年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号	。 / 〃	。 / 〃			
かめおかいせき 亀岡遺跡 第2次調査	みやぎ ものう 宮城県桃生郡 なるせ 鳴瀬町	045667	71023	38度 22分 30秒	141度 9分 8秒	2003. 9.29 ～ 2003. 11. 14	830m ²	調査計画 に基づく 学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
亀岡遺跡 第2次調査	城柵官衙 または 寺 集落	古墳時代 奈良時代	住居跡3棟 貝層6カ所	丸瓦 平瓦 土師器 須恵器 製塩土器		8世紀前葉から中葉頃の、カマド壁材へ多賀城政庁遺構期第I期の瓦を転用している住居跡1棟と、古墳時代中期後半の住居跡2棟を調査した。 古墳時代後期後半から奈良時代初頭頃の貝層を伴う集落を発見した。		

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第29冊
亀岡遺跡Ⅱ

平成16年3月22日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目22番1号
TEL (022)368-0102
FAX (022)368-0104
印刷所 今野印刷株式会社
